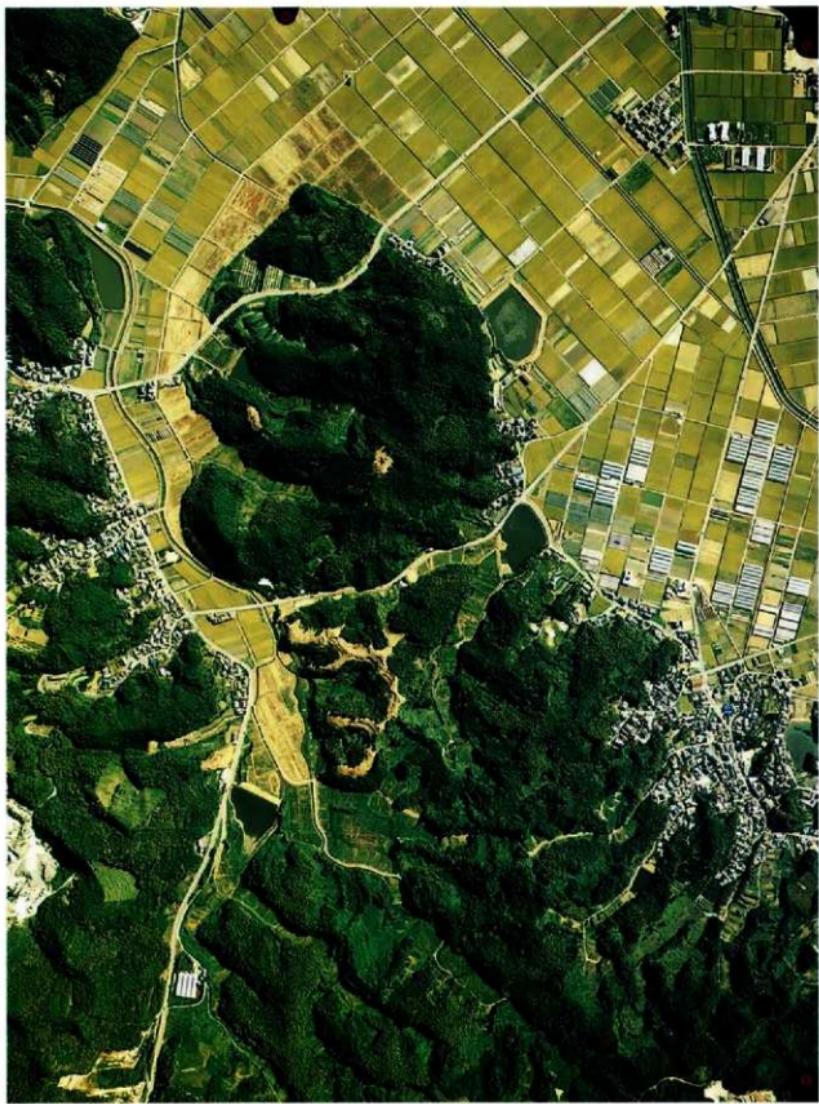


九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報 1

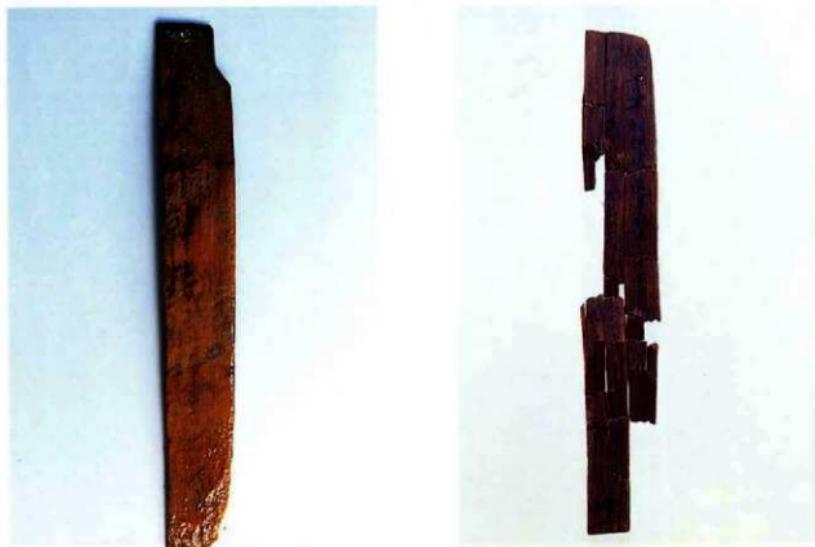
—元岡・桑原遺跡群発掘調査—

2001

福岡市教育委員会



事業地全景（西から）



上：石ヶ元古墳群（北から） 下：第7次調査出土木簡（左）、第15次調査出土木簡（右）

序

福岡市は大陸に近いという地理的条件から、文化の流入拠点、大陸との貿易基地として古くからの歴史を有しています。現在は歴史的、地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの様々な地域との交流や学術・文化などの交流を行っています。

現在、九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、本市の多核連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

本書は九州大学統合移転に伴い、1996年度から1999年度に行われた元岡・桑原遺跡群の確認調査及び発掘調査の概要を報告するものです。本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査をうけた福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学及び都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区、桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例 言

1.本書は九州大学統合移転に伴い1996年度から1999年度に行われた確認調査および発掘調査の概要である。元岡・桑原遺跡群は遺跡略号をMOTとし、確認調査(金原古墳、石ヶ原古墳を含む)を1次調査とし、以後、調査順に次数を付けた。なお、石ヶ原古墳群についてはこれらに含めず、KIMの遺跡略号とした。
2.本書の執筆・編集は各担当者が行い、分担は日次に記した。

目 次

1 遺跡の位置 (菅波正人)	1
2 調査組織 (松村博博)	1
3 事前調査の概要 (池崎謙二)	2
桑原金原古墳 (久住猛雄)	7
元岡石ヶ原古墳 (松浦一之介)	9
4 調査の概要	
調査の経過 (松村)	11
桑原石ヶ原古墳群 (松浦)	13
第2次調査 (久住)	18
第3次調査 (菅波)	19
第4次調査 (池崎)	22
第5次調査 (松村)	23
第6次調査 (松村)	24
第7次調査 (吉留秀敏)	25

第8次調査 (松村)	28
第9次調査 (松浦)	29
第10次調査 (松浦)	30
第11次調査 (松村)	31
第12次調査 (菅波)	32
第13次調査 (松浦)	35
第14次調査 (松村)	37
第15次調査 (吉留)	38
第16次調査 (松村)	40
第17次調査 (松浦)	41
5 おわりに (二宮忠司)	42
挿 図 目 次	
Fig.1 元岡・桑原遺跡群分布図 (1/15000)	4
Fig.2 金原古墳現況図兼景図および調査状況図 (1/300)	7
Fig.3 豊雲紋鏡断面図 (2/3)	8
Fig.4 芝草紋鏡断面図 (2/3)	8
Fig.5 元岡石ヶ原古墳丘山形図、トレンチ位置図及び墳丘断面図 (1/400)	9
Fig.6 石室実測図 (1/100)	10
Fig.7 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15000)	12
Fig.8 桑原石ヶ原古墳群分布図 (1/3000)	13
Fig.9 桑原石ヶ原古墳群石室実測図 (1/100)	14
Fig.10 桑原石ヶ原古墳群出土遺物実測図 (1/4)	16
Fig.11 第2次調査全体図 (1/1200)	18

Fig.12	第3次調査地点土層堆積実測図(1/200)	19
Fig.13	第3次調査全体図(1/600)	20
Fig.14	包含層出土規文土器実測図(1/3)	21
Fig.15	第5次調査全体図(1/400) 及び上坑実測図(1/80)	23
Fig.16	第6次調査全体図(1/400)	24
Fig.17	第7次調査全体図(1/1000)	25
Fig.18	製鉄炉SR413実測図(1/100)	26
Fig.19	出土遺物実測図1(1/4)	27
Fig.20	出土遺物実測図2(1/4)	27
Fig.21	第8次調査石室実測図(1/80)	28
Fig.22	第9次調査位置図(1/800)	29
Fig.23	2区遺構平面図(縮尺1/200)	29
Fig.24	第10次調査全体図(1/500)	30
Fig.25	出土石器実測図(1/2)	30
Fig.26	第11次調査全体図(1/400) 及び土器割り 遺物出土状況実測図(1/80)	31
Fig.27	第12次調査製鉄炉分布図(1/400)	33
Fig.28	谷部土層堆積実測図(1/100)	33
Fig.29	移動層出土遺物実測図(1/4)	33
Fig.30	製鉄炉023、024実測図(1/80)	33
Fig.31	元岡E-1・2号墳墳丘遺存状況及び トレント位置図(1/400)	35
Fig.32	元岡E-1号墳墳丘復元図(1/400)	35
Fig.33	2・3号墳墳丘断面図(1/80)	36
Fig.34	第14次調査全体図(1/300)	37
Fig.35	第15次調査全体図(1/600)	38
Fig.36	出土遺物実測図(1/4)	39
Fig.37	第16次調査全体図(1/400) 及び 南壁土層実測図(1/160)	40
Fig.38	1・2号墳墳丘遺存状況(1/200)	41
國版目次		
卷頭1	事業地全景(西から) 2上: 石ヶ元古墳群(北から) 下: 第7次調査出土木簡(左)、第15次調査出土木簡(右)	
Ph.1	金庫古墳調査状況全景(東から)	7
Ph.2	棺内遺物出土状況(北から)	7
Ph.3	菱雲紋鏡	8
Ph.4	芝草紋鏡	9
Ph.5	元岡石ヶ原古墳全景(北から)	10
Ph.6	石穴全景(南から)	10
Ph.7	桑原石ヶ元古墳群全景(西から)	14
Ph.8	6号墳墳丘遺存状況(南から)	14
Ph.9	33号墳石室余景(北から)	14
Ph.10	12号墳石室鍛冶工具出土状況(南東から)	15
Ph.11	9号墳I区墳丘土器出土状況(北西から)	15
Ph.12	8号墳石室環頭太刀出土状況(東から)	15
Ph.13	第3次調査全景(西から)	21
Ph.14	井穴050完掘(南から)	21
Ph.15	石經炉034完掘(北から)	21
Ph.16	石經炉056完掘(南から)	21
Ph.17	堅穴住居跡完掘(南から)	21
Ph.18	SO02遺存状況(北から)	21
Ph.19	第4次調査全景(北から)	22
Ph.20	テラスⅡ全景(北から)	22
Ph.21	テラスⅡ埋立て捨石1~3列(北から)	22
Ph.22	第5次調査全景(南から)	23
Ph.23	第6次調査全景(南東から)	24
Ph.24	第7次調査全景(北から)	25
Ph.25	第8次調査石室全景(北から)	28
Ph.26	第9次調査全景(東から)	29
Ph.27	第10次調査全景(東から)	30
Ph.28	出土石器	30
Ph.29	第11次調査遺物出土状況	31
Ph.30	第12次調査全景(西から)	34
Ph.31	製鉄炉分布状況(南から)	34
Ph.32	製鉄炉023完掘(北から)	34
Ph.33	製鉄炉024完掘(東から)	34
Ph.34	谷部鉄津堆積状況(東から)	34
Ph.35	製鉄炉019出土土灰焼器(東から)	34
Ph.36	谷部鉄形木製品出土状況(北から)	34
Ph.37	谷部木製管出土状況(東から)	34
Ph.38	第13次調査全景(南西から)	36
Ph.39	1号墳出土方格T字鏡	36
Ph.40	第14次調査全景(北から)	37
Ph.41	第15次調査全景(東から)	38
Ph.42	水田跡検出状況(東から)	38
Ph.43	木簡出土状況(西から)	39
Ph.44	木簡	39
Ph.45	第16次調査全景(南東から)	40
Ph.46	第17次調査全景(北から)	41
Ph.47	2号墳石室全景(西から)	41

1. 遺跡の位置

元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯にある。丘陵は小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入りこむ。遺跡は丘陵上や枝分かれした谷部に立地する。行政的には福岡市西区元岡、桑原に所在する。この地域はこれまで都市化の影響が少なく、調査の実施例は多くなかった。近年、新規部埋立て場の建設、圃場整備等によって調査が行われ、遺跡の状況がすこしづつ判明してきた。それでは時代ごとの遺跡の概要を見ていく。

縄文時代の遺跡では福岡市では数少ない貝塚が見られる。桑原飛鶴貝塚は道路拡張工事に伴って調査が行われ、主に縄文時代後期の土器や石器、貝輪、骨製品等が多量に出土した。また、貝層中に計6体の埋葬人骨が検出された。同時期の遺跡に県史跡の元岡瓜尾貝塚がある。大原D遺跡では埋め立て場建設に伴う調査で、縄文時代草創期から晩期に至る遺物が多量に出土した。中でも4次調査では草創期の焼失住居が検出され、該期の住居構造を考える重要な成果が得られた。

弥生時代の遺跡では海岸部に長浜貝塚、今津貝塚が展開する。丘陵上では小森遺跡（大原B遺跡）がある。病院建設に伴って調査が行われ、弥生時代中期後半から後期後半に至る多量の土器が出土した。土器の中には鹿の絵を描いた絵画土器もある。今津の呑山遺跡では今山遺跡と同様に玄武岩の露頭があり、弥生時代の前中期には石斧製作が行われていたと考えられる。埋葬構造は小田支右墓が古くから知られるが、この地域では明確な埋葬遺跡は少ない。祭祀遺物では唐泊の沖合で広形銅矛が引き上げられている。

古墳時代では山麓部に群集墳が形成されるが、調査例も少なく、状況は不明瞭である。また、集落遺跡は先述の大原A遺跡や大原B遺跡で小規模なものが発見されている程度である。隣接する前原市では事業地南側に御道具山古墳、泊大塚古墳が、志摩町では事業地西側に開1号墳、椎現塚、

稻葉1号墳、稻葉2号墳等の前方後円墳がある。

古代では当該地域は志麻（嶋）郡に属する。文献では正倉院に現存する最古（大宝二年）の戸籍の筑前国嶋郡川辺里戸籍がある。遺跡では海岸で良好な砂鉄が得られることから製鉄遺跡が多く分布する。大原A遺跡や大原D遺跡では8~9世紀の製鉄炉や鍛冶炉、多量の鉄滓が検出された。また、半島の西側の八熊製鉄遺跡でも8世紀後半の製鉄炉や鍛冶炉の他、木炭窯も検出された。当地域が鉄生産に関して重要な役割を果たしていたことを伺うことができる。

2. 調査組織

調査委託 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 生田征生 町田英俊 西憲一郎（前任）

文化財部長 柳田純孝 後藤直

平塚克則（前任）

調査庶務 文化財整備課

文化財整備課長 上村忠明

管理係長 井上和光

管理係 岩屋淳美

調査担当 大規模事業等担当

課長 二宮忠司 山崎純男（前任）

主任 松村道博 池崎謙二（前任）

吉留秀敏 皆波正人 松浦一之介

小林義彦 久住猛雄（前任）

調査調整 都市整備局大学移転対策部

3. 事前調査の概要

(1) 踏査の概要

1) 実施期間

平成7年2月15日～12月31日

2) 調査方法

対象地をくまなく踏査し、地表面から観察しうる古墳、山城、埋蔵文化財包蔵地の分布状況を確認した。また、空中電磁波探査、地中レーダー探査を行い製鉄遺構の分布、主要古墳の内部主体の状況を予測した。

3) 踏査結果

平成6年度はA、B区を中心に踏査を行い、平成7年度はA～G区の全域を対象として踏査を行った。以下、各区ごとに踏査結果の概要を述べる。

[A区]

丘陵最高位に全長約60mの前方後円墳（塙除古墳）1基、その北側尾根筋に3基の小円墳、さらに、A区北西丘陵北端部に往約26mの大型の円墳（絆塙古墳）1基を新たに確認した。この墳丘頂平坦面には中世墓地が営まれている。また、丘陵東端部に中世山城の曲輪（くるわ）かと思われる平坦面が確認できた。塙除古墳のレーダー探査では前方部に1基、後円部に2基の主体部の存在が推定されている。

[B区]

これまで確認されていた元岡古墳群A群1基、桑原古墳群A群2基を再確認したほか、金堀（かなぐそ）池の西側丘陵上に全長約24mの小型の前方後円墳（金堀古墳）1基、その南端、水崎山から西側に延びる尾根筋上に全長約50mの前方後円墳（石ヶ原古墳）1基、さらにこの南の尾根上に円墳7基、水崎山山頂にも円墳1基を新たに確認した。

また、金堀池の南東部の谷部に多量の鉄滓とともに古墳時代の土器片が散布し、その時代の製鉄遺構の存在が窺える。空中電磁波探査の結果でも他に数箇所製鉄遺構の存在することが予想される。

水崎山からB区西北端の戸山に至る南側尾根筋

を中心に土壘、堀切、緩斜が見られ中世山城「水崎古城」の範囲と推定される。

[C区]

これまで確認されていた元岡池ノ浦古墳（前方後円墳）、元岡古墳群B群3基、C群1基、D群2基の再確認をしたほか、この区の北半部（小字石ヶ元）の丘陵に約35基からなる円墳の群集墳が新たに確認されている。空中電磁波探査では北側谷筋に製鉄遺構の存在する可能性がある。

[D区]

これまでに確認されていた元岡古墳群F群1基を再確認したが、位置に若干の誤認があり、旧位置よりわずかに南西部の丘陵尾根であることがわかった。この他、北西側丘陵に古墳の石室石材の抜取り穴かと思われるもの1基があったが明確でない。全体にこの地区は瘦せ尾根で、古墳等の存在は希薄であるが、空中電磁波探査の結果では西側谷筋に製鉄遺構の存在する可能性がある。

[E区]

D区同様の瘦せ尾根で、古墳は検出されていない。しかしながら、中世山城の遺構としてE区南西端丘陵上に曲輪と思われる平坦面、石垣状遺構、上星等が検出されており、「馬場城」と推定される。また、空中電磁波探査の結果、西側谷筋に製鉄遺構の存在する可能性がある。

[F区]

大半が志摩町に属する区域である。すでに大規模な造成工事が進行しており、辛うじて旧地形を留めているところでも古墳の存在は認められない。また、製鉄遺構の存在する可能性も低い。

[G区]

元岡古墳群E、F、G、H、Iの各群を再確認した。その結果元岡古墳群H群およびI群の円墳と考えられていたそれぞれの1基はそれぞれ全長約50m（峰古墳）、30mの前方後円墳であることが明らかになった。またE、G群は近世墓地であることが明らかになった。

(2) 試掘調査の概要

九州大学統合移転用地内の造成予定地を試掘対象とし、バックホーの進入可能な田畠、谷部等の平坦面について実施した。なお用地未買収などの理由により一部試掘出来なかった。丘陵尾根部、伐採を伴なう谷部については、工事に伴なう伐採終了後に実施する事とした。

1) 実施期間

平成8年3月11日～9月30日

2) 調査方法

対象地域内の各田畠を対象として基本的に一筆ごとに試掘トレーナーを設定し、遺構、遺物の有無を確認する。また、その埋蔵状態を把握するとともに地形の形成過程を確認するよう努めた。試掘はバックホーを用いて掘削を行ない、作業の効率化に努めた。また、記録として平面の遺構の検出状況、土層堆積状況の概略図を作成し、記録写真的撮影を行なった。

3) 調査の概要

[A区]

水崎山から派生する小山塊と、その周辺の水田部からなる。北から東南方の水田部は今津浜の潟が丘陵端まで広がっており、遺跡はないが、丘陵の北西の水田では2箇所に遺跡が認められた。

1は経塚古墳から北へ伸びる緩斜面で、一辺2mの方形土坑が見られ、古代の集落遺跡と思われる。

2は金原古墳から伸びる丘陵端部で、古代～中世の土器片とともに土坑、柱穴が検出されており、古代～中世の集落遺跡である。

[B区]

水崎山の丘陵と、その北側に複数状に開拓された谷部及び水田からなる。6箇所に遺跡を確認できた。

1は戸山の東側の西側斜面に立地しており、密度は薄いが柱穴が広がっており古代～中世の集落、生産遺跡である。

2は1の谷の開口部に位置し、別所山の東側丘陵端に立地している。ここでは、弥生時代～古代

の堅穴住居跡や土坑、溝、柱穴等が密に分布しており、規模の大きな集落遺跡である。この遺跡の南側谷部では、弥生時代後期～奈良時代の土器や石器が多量に重複して堆積している。

3は金原古墳の立地する丘陵の北端にあたる。古墳時代の土器とともに、土坑、柱穴を検出し、古墳時代～古代の集落遺跡である。

4は経塚古墳の南側に開拓する谷のほぼ中央部に位置している。炉跡、溝状遺構、柱穴等を検出し、古代～中世の製鉄遺跡である。

5は北西に開拓した谷に位置する。谷の中位に古墳時代～奈良時代の須恵器を大量に含む厚い層が見られ、また、谷頭部では中世の遺物と柱穴が検出されており、古墳時代から中世にかけての長期にわたる集落遺跡である。

6は金原池の南に接した小支谷の斜面にあり、踏査の際、古墳時代の須恵器とともに多量の鉄滓が採集され、古墳時代の製鉄遺跡と考えられる。

[C区]

丘陵北側の小谷水田で1～4の遺跡を確認できた。

1は旧河川の堆積による礫層上に、土師器、須恵器など古墳時代の遺物包含層が認められ、密度は高くないが柱穴、上坑等の遺構も検出されており古墳時代の集落遺跡である。

2は丘陵北側に開拓した東端の小支谷で、緩斜面で炉跡、鉄滓が検出されており、時期は明確ではないが、製鉄遺跡の存在が認められる。

3も北側に開拓する小支谷で、下半では厚い青灰色シルト層の堆積がみられるが、中央部から谷頭部にかけて中世遺物とともに、柱穴が検出された。中世集落である。遺跡密度は高くな。

4は丘陵西側の小支谷で、厚い真砂土の埋め立てがあるが、緩斜面に散在するが柱穴が認められる。古代の小規模な集落である。

5は北側緩斜面に少量の土師器、柱穴を検出した小規模の古代集落である。

6は南側の小支谷に立地する、炉、柱穴をもつ中世製鉄関係集落である。

7は丘陵南側に多くの柱穴、土坑をもつ規模の



大きな弥生～古墳時代の集落が確認された。

8は北側斜面に位置し、須恵器を含む古墳時代包含層があり、B地区5の遺跡とともに南側丘陵鞍部にまで広がるものと考えられる。

[D区]

平川池の西側で2箇所に遺跡を確認した。

1は桑原側の丘陵端部に位置し、畑の造成で墳丘は削られているが、古墳の石室の一部が確認され、周辺では古墳の周溝、建物柱穴が検出されている。

2は谷の疊層の上に、多量の古墳時代から古代にかけての遺物をもつ包含層が確認された。

3では主谷の疊層上に、4の製鉄炉に起因する鉄滓と土師器等の包含層が確認されている。

4は西に伸びる小支谷に営まれた古代の製鉄遺跡で、全面にか跡、鉄滓が広く分布しており、高密度である。

5は削平された丘陵の北端部にあたり、量的には少ないが土師器、柱穴が検出されている。

6は東側に開拓した支谷の中央部にあたり、青灰色シルトの厚い堆積がみられるが、西側斜面の一部に壇の完形品や柱穴が検出されており、小規模な奈良時代の集落が存在する。

7も南にむかって開拓する小支谷で、土師器、柱穴が検出されており、古代の集落遺跡が存在する。

8は谷の北西側支谷緩斜面に立地しており、遺構は密でないが、焼土、木炭、微細な土器片をもつもので、木炭、鉄などの生産にかかわる遺跡である。

[E区]

いくつかの谷がみられ、谷の下半部分は青灰色シルトの厚い堆積があり遺跡は認められないが、谷上半で2ヶ所の遺跡が確認された。しかし全体に密度は薄い。

1は東側支谷の谷頭部で、焼土、木炭などとともに柱穴が検出されており、古代の生産にかかわる集落であると思われる。

2では小支谷に広く焼土、木炭が分布しており、また、土器片とともに焼土坑などの遺構が検出さ

れており、木炭、鉄などの生産にかかわる遺跡である。

[F区]

大半が志摩町に含まれており、丘陵の大規模な削平、谷の埋め立てが進行しており、地形の改変が著しい。試掘可能な南北に伸びる谷は本来急斜面で、遺跡の遺存状態は不良である。

1は東側小支谷の緩傾斜面に炉または焼土坑が検出されており、古代の生産にかかわる遺跡である。

2は地山を削って作ったと思われる道路面に多量の鉄滓、か跡が散布しており、時期は明確でないが製鉄遺跡である。

[G区]

前原市との境に接する。丘陵南斜面に位置する谷で、試掘前より遺跡の濃密な分布が予想された区域である。現在3ヶ所の遺跡が確認できている。

1では谷の南北傾斜面に多量の瓦、上部器、須恵器、鉄滓の厚い包含層があり、平安時代前半の寺院もしくは官衙施設の存在が考えられる。

2は3本の谷からなる遺跡群で面積も広い。一部道路造成時に破壊を受けている。いずれの谷も東側傾斜面を中心に弥生時代壺棺、奈良時代の土師器、須恵器、中世陶磁器をはじめ多量の鉄滓が出士している。また柱穴も多く検出されており、弥生時代から中世にかけて継続した集落であるといえる。ここでは谷底部に堆積した青灰色シルト中にも多くの遺物が包含されており、遺跡の密度はきわめて高い。

3では谷頭部傾斜面で縄文時代草創期の土器が一括して検出されている。遺構密度は必ずしも高くはないが、当該期の遺跡は希少であり貴重である。

Tab. 1 九州大学統合移転地内（元岡・桑原遺跡群）発掘調査一覧

遺跡名	所在地	調査年月日	調査古墳又は調査面積	時期	検出遺構
確認調査					
桑原金屎古墳	西区大字桑原字金屎	H.8.8.20～H.8.11.29	1基	古墳時代前期	前方後円墳・粘土被
桑原石ヶ原古墳	西区大字桑原字石ヶ原	H.8.8.20～H.8.11.29	1基	古墳時代後期	前方後円墳・横穴式石室
石ヶ元古墳群	西区大字桑原字石ヶ元	H.8.8.27～H.8.11.29	32基	古墳時代後期	竪穴系横口式石室 横穴式石室
発掘調査					
石ヶ元古墳群	西区大字桑原字石ヶ元	H.9.12.1～H.10.10.31	12基	古墳時代後期	横穴式石室
第2次	西区大字元岡字柿ヶ元	H.9.12.1～H.10.3.25	3,007m ²	平安時代 奈良時代 縄文時代	水田跡 溝2条 土壤・遺物包含層
第3次	西区大字元岡字瓜尾	H.9.11.19～H.11.2.22	3,500m ² 1基	古墳・弥生時代 縄文時代草創期 ～早期	住居址・掘立柱建物 集石遺構 33基・炉穴 横穴式石室
第4次	西区大字元岡字	H.9.12.1～H.10.3.31	1,219m ²	室町時代	掘立柱建物・溝
第5次	西区大字元岡字石ヶ元		2,500m ²	古墳時代後期	土壤 3基・包含層
第6次	西区大字桑原字石ヶ元	H.10.6.30～H.10.8.28	2,800m ²	古墳時代後期	包含層
第7次	西区大字元岡字池ノ浦	H.10.5.6～H.11.6.11	7,500m ²	古墳時代後期・ 奈良～平安	住居址・掘立柱建物・ 製鉄遺構・池状遺構 「壬辰年」・「」銘木簡・ 中空円面鏡他
第8次 元岡古墳群M群	西区大字元岡字瓜尾	H.10.9.16～H.10.12.25	1基	古墳時代後期	横穴式石室
第9次	西区大字元岡字池ノ浦	H.10.11.2～H.10.12.10	190m ²	弥生時代	住居址 2基
第10次	西区大字桑原字柳ヶ浦	H.11.1.6～H.11.3.31	1,336m ²	遺構削平	
第11次	西区大字桑原字柳ヶ浦	H.11.1.6～H.11.3.20	1,650m ²	古墳時代後期	土壤・包含層
第12次	西区大字桑原字履形	H.11.4.1～H.12.3.28	5,500m ²	奈良時代～平安 時代	製鉄炉 27基
第13次 元岡古墳群E群	西区大字元岡字小坂	H.11.4.12～H.11.9.28	3基	古墳時代	前方後円墳 1基 円墳 2基
第14次	西区大字桑原字柳ヶ浦	H.11.4.22～H.11.7.22	1,200m ²	古代	包含層
第15次	西区大字桑原字履形	H.11.6.11～H.11.9.28	3,500m ²	縄文～古代・ 中世	中世水田跡・縄文～古代 包含層・「祓い」の木簡
第16次	西区大字桑原字牛切	H.11.8.2～H.11.11.10	2,500m ²	縄文時代・古代	包含層
第17次 元岡古墳群B群	西区大字元岡字池ノ浦	H.11.9.10～H.11.12.8	2基	古墳時代後期	横穴式石室
第18次	西区大字桑原字別府	H.11.10.10～	6,700m ²	古代～中世	製鉄遺構・掘立柱建物
第19次	西区大字桑原字牛切	H.11.11.18～H.11.12.24	3,000m ²	古代	包含層
第20次	西区大字桑原字戸山	H.12.4.5～	5,000m ²	古墳～平安時代	掘立柱建物・池状遺構 蒂具・「延暦四年」「大寶元年」等の紀年銘木簡・祭祀遺物
第21次	西区大字桑原字石ヶ元	H.12.4.4～H.12.9.21	2,900m ² 3基	古墳時代・中世	横穴式石室・溝
第22次	西区大字桑原字牛坂	H.12.4.13～H.11.10.20	3,890m ²	古代	掘立柱建物・井戸・製鉄 遺構
第23次		H.12.6.10～	10,400m ²		焼土坑
第24次	西区大字桑原字金屎	H.12.8.21～	3,500m ²	古代	製鉄炉
第25次	西区大字桑原字別府	H.12.12.11～	2基	古墳時代	横穴式石室

桑原金屎古墳

金屎古墳は、水崎山から西に派生する丘陵が、さらに北側に伸びた狭い丘陵尾根上に立地し、墳丘頂部の標高は53.77mを測る。なお、北側の丘陵下の平野部との比高差は約35m前後である。

調査は、墳丘の規模・形態と埋葬施設の構造を確認することを目的とした。墳丘はトレントと面的な調査区を設定し確認調査を行った。墳丘頂部では粘土被を確認し、これを精査している。

調査の結果、前方後円墳であることが判明した。墳丘規模は、全長23.8m、後円部径12.4m、前方部幅11.8m、くびれ部幅7.0mを測る。ただし墳

裾は地山整形のみであるため、墳端が不明確な部分がある。墳丘の高さは、後円部東側裾部からは約1.8mを測る。瘦せ尾根上の築造のため、墳裾の標高は同一水平面をなさない。墳丘の多くは地山削り出しによるが、後円部は高さ1m弱の盛土を有し、前方部には非常に薄い盛土が認められる。また後円部と前方部の間は、現況測量図と盛土の厚さから、隆起斜道があった可能性がある。

なお、前方部前面は浅い小溝で区切られるが、この西側に平坦面が続き、8.5m西に溝状の落ち込みが認められた。またその小溝の南北端は、東側の前方部裾部へ続くだけでなく、西側にも屈曲して別の両隅角部をなすこと、さらに土層から一部



Ph. 1 金屎古墳調査状況全景（東から）



Ph. 2 棺内遺物出土状況（北から）

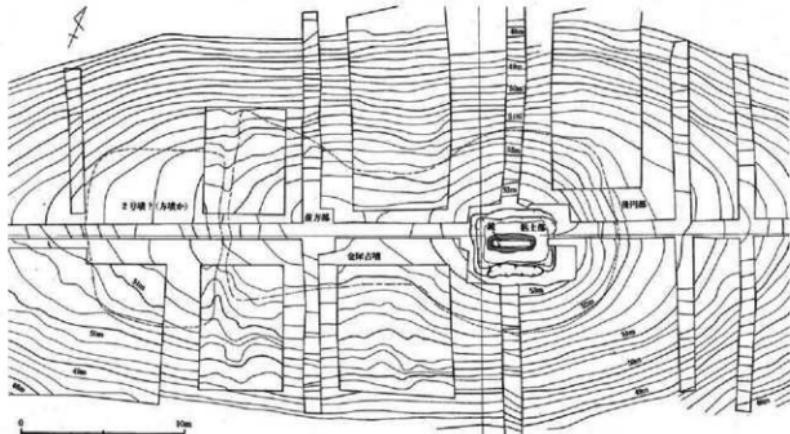
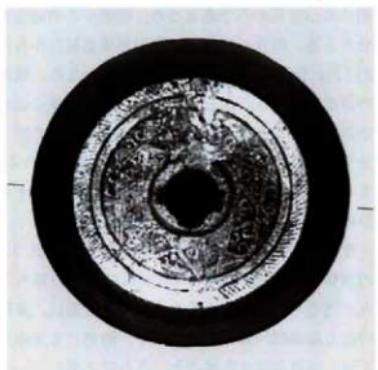
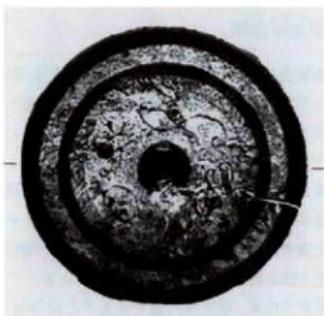


Fig. 2 金屎古墳現況測量図および調査状況図 (1/300)



Ph. 3 菱雲紋鏡 (約 1/2)



Ph. 4 芝草紋鏡 (約 1/2)
(Ph. 3・4 は X 線写真だが画像処理上縦が短く歪んでいる)

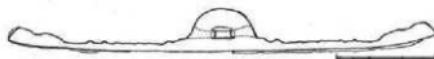


Fig. 3 菱雲紋鏡断面図 (2/3)



Fig. 4 芝草紋鏡断面図 (2/3)

盛土が認められることから、この部分は南北約 11m、東西約 8.5m の長方形の別の古墳の可能性が高い。前期の前方後円墳には方墳を付設するものが多く、主体部は未確認だが、「桑原金屎 2 号墳」と仮称する。今後の確認が必要である。

後円部中央の埋葬施設は、割竹形木棺をおさめた粘土椁である。主軸は墳丘主軸とほぼ同じである。棺床は地山を掘り込む型式で粘土床がある。木棺の長さは 2.7m、幅は 50~58cm で、底面は丸みを有するが平底気味である。頭位は西で、被葬者頭部付近両側に、いずれも鏡面を内にして銅鏡 2 面を副葬していた (Ph. 2)。また床全面にベンガラが塗布され、頭部には朱が撒かれていた。その他、被覆粘土落込みから古式土師器の壺の胸部小片 1 点と、墓壙埋土中からガラス小玉 1 点を検出した。なお墓壙は、土層の検討や平面的な精査から構築墓壙と判断され、詳細は本報告で提示したいが、以下のようなおよその墓壙構築・盛土過程が推定される。①旧地表面から長方形の墓壙を掘削し、掘削土を周囲に盛土し周囲は大きな墓壙状とするが、主軸上東側のみは盛土されず作業道状に残される。→②埋葬終了後、墓壙を埋めて最終的に後円部上部を盛土する際に作業道も埋め

られ閉じられる。

銅鏡は、棺内右側に置かれた径 13.1cm の鏡 (Ph. 3) と、左側の径 11.6cm の鏡 (Ph. 4) がある。いずれも鋳が著しく文様が不鮮明である。前者は文様が類例不詳であるが、獣首鏡や蟲龍鏡などの外区に用いられる菱雲文が内区にあることから「菱雲紋鏡」と名付けたい。外区は途中に無紋? の凹带を有する。後者は「芝草紋鏡」ないし「雲紋鏡」である。小乳を間に取り込んだ大小の S 字をクロスさせた芝草紋(雲紋)が 4 単位あるが、小乳配置がいびつである。外区凹带は無紋と見られるが、類例の老司古墳 3 号石室・大分県野間 3 号墳出土鏡では複線波紋がある。また、出土兩鏡の鏡孔形態はいずれも断面長方形基調で、鉛孔は接地せず鉛座よりも高い。したがって中国鏡としたいが、芝草紋鏡は仿製鏡とされることもあり検討を要する。また芝草紋鏡の小乳配置は仿製三角縁神獸鏡と類似性がある。なお、いずれの鏡も主に鏡面側に少なくない布痕が付着遺存している。

最後に、鑄造時期については、粘土椁の型式や前方部の形状、銅鏡の類例の時期等から古墳時代前期後半、前方後円墳集成 3 期~4 期を考えている。詳細については本報告で明らかにしたい。

元岡石ヶ原古墳

元岡石ヶ原古墳は、水崎山から北西に向かって派生する標高70m程度の細い尾根上に立地する前方後円墳である。ここから北に派生する舌状丘陵の先端には、4世紀代の前方後円墳である金屎古墳が立地する。また、南及び西側へ派生する丘陵上には、元岡古墳群J群、同N群、桑原古墳群A群などの群集墳が所在する。

調査は墳丘の規模と埋葬主体部の構造を明らかにし、併せてその築造年代を確定することを目的として実施した。調査期間は平成8年8月27日

～同年11月29日で、調査面積は1,280m²であった。

本古墳の周辺は、近代の果樹園の造成により地形が大きく改変されている。またこの丘陵群一帯には、中世に水崎山山頂を主郭とする「水崎城」が築城され、これにより本古墳の墳丘自体も少なからず改変されている。調査はまず内部主体を精査し、墳丘の主軸に併せて13本のトレンチを設定しその規模を確認した。

調査の結果、石ヶ原古墳は全長54m、後円部径30m、前方部長24m、前方部幅22.4m、くびれ部幅12.4mに復元される(Fig.5)。後円部

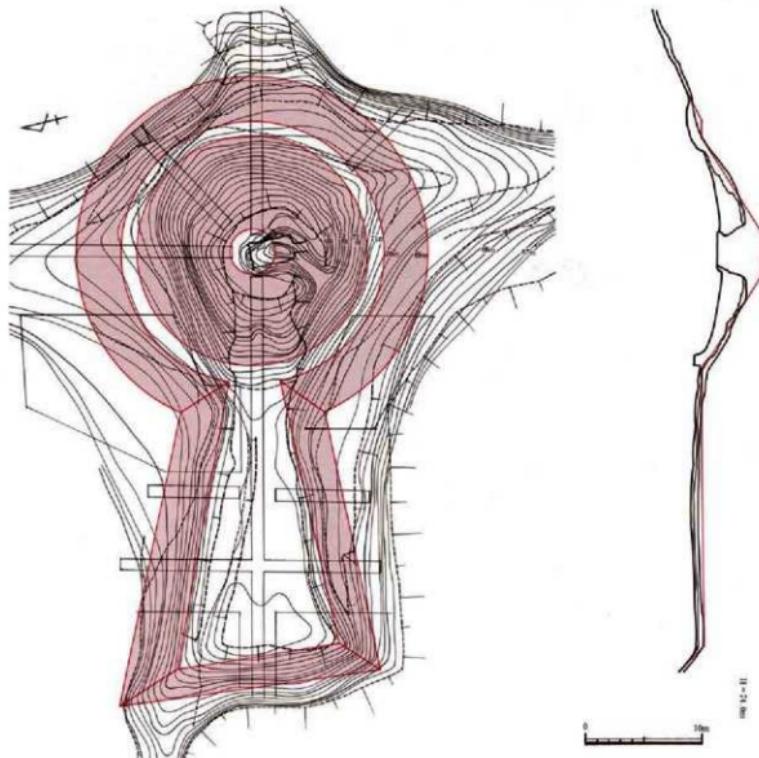


Fig. 5 元岡石ヶ原古墳墳丘測量図・トレンチ位置図及び墳丘断面図 (1/400)

は二段築成で、地山整形を行った後、版築状に高く盛り土されている。版築は粘質土と砂質土の細かい互層で丁寧に盛り土されているが、地表面から地山まで縱方向に多くの亀裂があり、土層にズレが生じていた。また、10トレンチでは、周溝の底部を確認した。前方部は一段築成で、後円部に対して非常に低平である。地形上の制約からか、左右非対称となっている。地山整形を行った後、薄く盛り土されている。また、後世に前方部の南側墳丘が削られ、北側に盛り直された痕跡が認められた。墳丘に葺石などの外表施設は確認されなかったが、8トレンチでは旧表土層の直上に人頭大程度の花崗岩の捨て石が検出された。

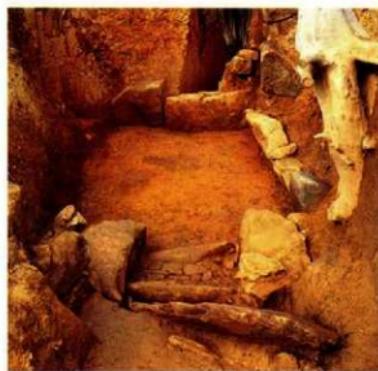
内部主体は、両袖式单室の横穴式石室である(Ph. 6・Fig. 6)。石室主軸はS-3°-Wで、南側に開口する。ほとんどの石材が抜き取られ、腰石及び右隅角の一部を留めるにすぎない。左側壁は遺存せず、奥壁はくさびで削られている。右側壁長3.6m、奥壁幅2.1mを測り、奥壁は2石、右側壁は3石を配し腰石としている。石材には花崗岩の転石及び割石を使用する。袖石は横位に配される。敷石は葬道のみ遺存し、玄室部分は擾乱され遺存しない。葬道は長さ2mで、床面には2カ所に棚石が配される。第1棚石は細長い花崗岩の転石を使用し、閉塞石の根石としている。第2棚石も同様の石材を用いる。閉塞石には長さ150cm程度の扁平な板石を立てて使用していたものと考えられる。

石室やトレンチ内からは、須恵器(坏身、坏蓋、高坏、器台、脚付長頸壺など)、土師器(高坏、小型丸底壺など)のほか鐵器片(太刀)が出土している。しかし石室内は擾乱が激しく、原位置を保ったものは皆無であった。また中世の遺物としては、明染付碗、青磁片などがごく少量ではあるが出土しており、山城に関連する遺物と推測される。

本古墳の築造年代は、出土した土器の年代観から6世紀中葉に築造され、6世紀後半まで追葬されたものと考えられる。



Ph. 5 元岡石ヶ原古墳全景（北から）



Ph. 6 石室全景（南から）

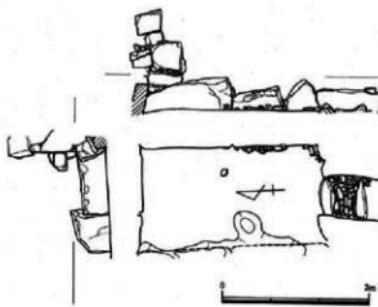


Fig. 6 石室実測図 (1/100)

4. 調査の経過

1) 調査に至る経過

平成 6 年 2 月九州大学から福岡市に新キャンパス大学移転用地の取得の依頼があり、同年 3 月九州大学、福岡市、福岡市土地開発公社（以下公社とする）は用地取得についての覚書を締結した。事業用地は公社が福岡市に代わり代行取得し、公社は開発に必要な調査を行うこととなった。平成 7 年 2 月九州大学から福岡市に対して用地内の埋蔵文化財の事前調査の依頼があったことから公社と福岡市で委託契約を締結して用地内の埋蔵文化財の踏査を実施した。用地は 275ha と広大であったので踏査が終了したのは平成 7 年 12 月であった。平成 8 年 3 月九州大学、福岡市、公社間で「造成に関する覚書」が締結され、その中で公社は「事業用地の埋蔵文化財調査等を行うものとする」との一項が盛り込まれたことから以後、埋蔵文化財の調査に関しては公社と福岡市との間で委託契約を締結して事業を進めることとなる。

平成 8 年 3 月から 9 月まで試掘調査を行い、同時に桑原石ケ元古墳群と前方後円墳の桑原金栗古墳、元岡石ケ原古墳の確認調査も並行して行い（第 1 次調査）、11 月からは C-1 地点（第 2 次調査）の発掘調査を開始した。同月、これまでの調査結果を記者発表し、総合的に判断し九州大学の移転に大きな支障はないであろうとの考えを示したところ、九州考古学会、日本考古学協会等から現状保存の要望書が提出された。翌 9 年にかけてマスコミを賑わし、関係機関で協議が続けられ、その間、発掘調査の中止という事態に陥った。さらには最古の戸塚川邊里の墳頂が元間であるとの説が出され、平成 9 年 6 月、九州考古学会主催の「筑紫肥君の謎をさぐる」シンポジウムまで開催された。保存に関する問題は最終的に同年 7 月、九州大学で 6 基の前方後円墳のうち 5 基、桑原石ケ元古墳群 30 基のうち 17 基、他の円墳 38 基のうち 18 基を現状保存する決定がなされ、一応の収束をみた。

2) 調査の経過

発掘調査は保存緑地として残る個所はそのままの状態で残し、造成工事で破壊される部分のみの調査に限定して実施している。さらに造成工事に最初に着手する C 地区から調査を開始した。

平成 8 年度は伐採を伴わない谷部及び耕地部の試掘調査、桑原石ケ元古墳群、桑原金栗古墳、元岡石ケ原古墳の確認調査も並行しておこなった。本調査は C-1 地点（第 2 次調査）を 11 月 11 日から実施した。第 2 次調査では縄文時代晚期の貯蔵穴が 2 基確認でき、この時期からの遺構の広がりを確認できた。

平成 9 年度には古墳群の保存問題が顕在化したことにより、その問題が解決するまでは桑原石ケ元古墳群の確認調査を実施し、11 月からは桑原石ケ元古墳群の本調査及び第 3、4 次調査を行った。第 3 次調査では弥生時代の集落の下から縄文時代草創期から早期にかけての土器や集石炉を検出した。

平成 10 年度は桑原石ケ元古墳群及び第 3 次調査を前年度から継続し、新たに第 5 ~ 第 7 次調査を開始し、さらに D 地区の一部の調査（第 10・11 次）に着手した。第 3 次調査では 50cm ~ 150cm の厚さに縄文時代草創期～早期の文化層があり土器や石器が多く出土している。第 7 次調査では斜面を造成して掘立柱建物や製鉄炉、鍛冶炉等が見られ予想もしなかった「壬辰年韓鐵□□」の木簡が出土したことは驚きであった。

平成 11 年度は D・E 地区につづき、B 地区の一部に着手することが出来た。調査次数としては 12 次調査から 19 次調査となる。12 次調査では 27 基もの製鉄炉が幅 60m の範囲に構築され、その谷筋（第 15 次）から「裁い」の木簡が出土し、公的施設を伺わせる。なお、この地点は遺跡の重要性から九州大学で保存の方向性が打出されている。

平成 12 年度は B 地区の調査及び、製鉄遺構の確認調査を実施している。調査中の第 20 次調査では多数の木簡、墨書き土器等から 8 世紀代の地方行政施設の可能性が持たれている。

Fig. 7 元岡・桑原道路群調査地点位置図 (1/15000)



桑原石ヶ元古墳群

桑原石ヶ元古墳群は、大原川右岸の柳ヶ丘陵上に立地している。調査に先立つ事前の踏査では、当初 34 基の古墳群を予想したが、発掘調査の結果数基は古墳でないことが判明し、また新たに検出された古墳もあり、総基数は 32 基となった。調査面積は 12,190 m² であり、調査期間は平成 8 年 4 月 1 日から平成 10 年 10 月 31 日までであった。(内、1~3 号墳は平成 12 年度の調査である)。九州大学の保存方針により、9 号墳から 27 号墳を結んだ以南の古墳及び 3 号墳以東の古墳、すなわち 1~3、9、17~27、37 号墳を記録保存し、それ以外の 4~8、11~14、28~36 号墳については確認調査を行い、現状保存している (Fig. 8)。

本古墳群は近世初頭の福岡城築城時の石材抜き

取りや、近代の果樹園の造成などによって大きく破壊され、遺構の遺存状況が良好でなく、規模や構造に関して不明な点が非常に多い。

古墳群は全て円墳からなる。墳丘規模は 10 m 前後~20 m 程度で、この内 20 m を越えるのは 2・6 号墳の 2 基である。9 号墳では段築が確認できた。墳丘は粘質土と砂質土の互層で版築状に盛り土される。外護列石は 20 号墳のみで確認された。葺石などの外表施設はない。記録保存地区では墓道の検出に努めたが、地形の改変が著しく遺存していなかった。

内部主体は横穴式石室であるが、完存するものは皆無であり、完全に石材が抜き取られているものもあった (Fig. 9)。この内、西端の尾根上に立地する 30~36 号墳は竪穴系横口式石室である。いずれも玄室長 2~3 m、幅 1 m 程度の長方形プランである。1 は 33 号石室で、花崗岩の小口積

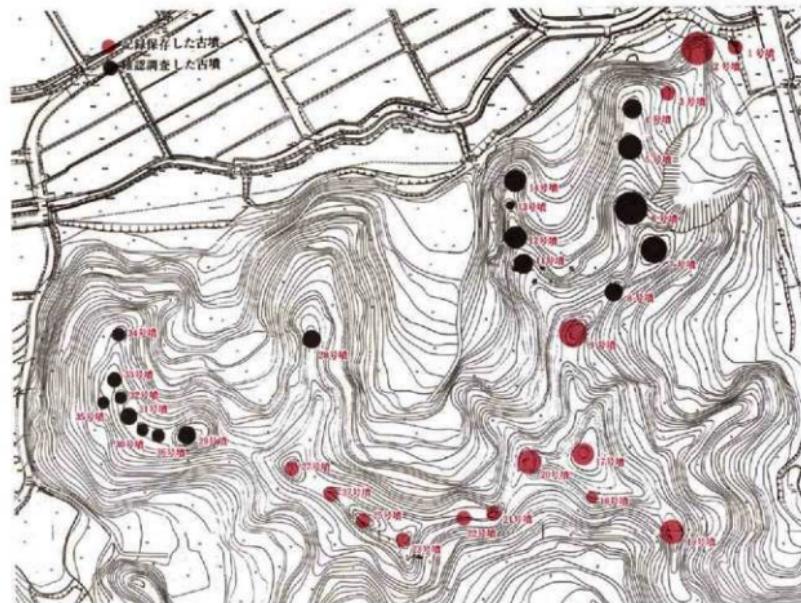


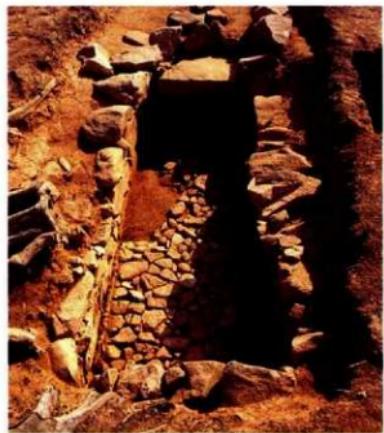
Fig. 8 桑原石ヶ元古墳群分布図 (1/3000)



Ph. 7 桑原石ヶ元古墳群全景（西から）



Ph. 8 6号墳墳丘遺存状況（南から）



Ph. 9 33号墳石室全景（北から）

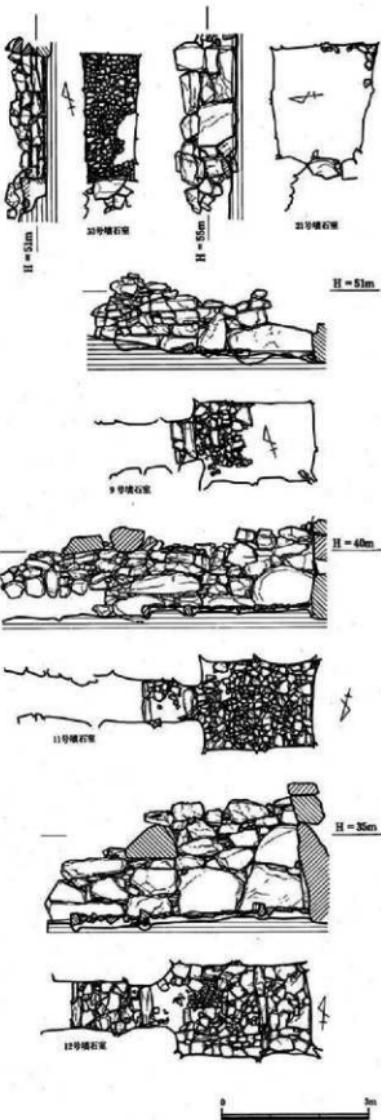


Fig. 9 桑原石ヶ元古墳群石室実測図（1/100）

で構築される。床面には敷石が施され、横口部は一段高い。

1号墳から29号墳までの石室は全て両袖式単室の横穴式石室である。2は21号石室である。やや正方形に近い玄室プランを呈し、「ハ」の字形に開く短い羨道が附設される。袖石は立てて用いる。築造年代は6世紀中葉と考えられる。3は9号石室である。玄室は長方形プランを採用する。袖石は横位に置かれ、奥壁腰石は2石配する。羨道は玄室に向かってやや傾斜する。4は11号石室である。奥壁腰石は1石で、非常に長い羨道が附設される。追葬時に第一櫛石を置き直している。5は12号石室である。奥壁に鏡石を置き両側壁は腰石に2石配する。初葬時の床面は奥壁側に扁平な石材を立てて仕切られている。このような仕切りは2・19号石室でも確認された。本古墳群の石室構造の特徴は、袖石が横位に置かれるのが非常に多い。石室に使用される石材は、概ね花崗岩の転石及び削石を用いるが、3号墳のみは玄武岩を用いて構築されている。

比較的遺存状況の良好であった古墳からは多くの遺物が出土している(Fig.10)。須恵器には壺(2~13)・高壺(16)・壺(18・19)・長頸壺(17)・大甕・平甕・提瓶(20)など、土師器には高壺・碗(14)・小型丸底壺(15)などの他、7号墳と9号墳の墳丘からは、陶質土器の壺が出土した(Ph.11)。鉄器は、鎌(25~27)・太刀(8)・弓金具(21)などの武器の他、鋸(22)・刀子(23)・(24)などの工具類が出土した。8号墳石室からは金銅装單鳳環頭太刀が出土した(Ph.12)。馬具には轡・雲珠・杏葉・鞍金具・輪鎖や、銅製馬鐸・馬鈴などがあり、鉄地金銅張のものもある。これらは1・6・8・11・12・20号墳などから出土した。装身具類には耳環類・ガラス製玉類・碧玉管玉・翡翠製勾玉・土製練玉などがある。人骨が出土した古墳は12・28号墳の2基のみであったが、遺存状況は良好でなかった。製鉄関連の遺物としては、12号墳石室から鉄製鍛冶工具一式(金砧・金鉗・金槌2点)が出土した(Ph.10)ほか、1・2・6・11・28・29号墳から鉄滓が、5・27・33号墳か



Ph.10 12号墳石室鐵冶工具出土状況（南東から）



Ph.11 9号墳I区墳丘土器出土状況（北西から）



Ph.12 8号墳石室環頭太刀出土状況（東から）

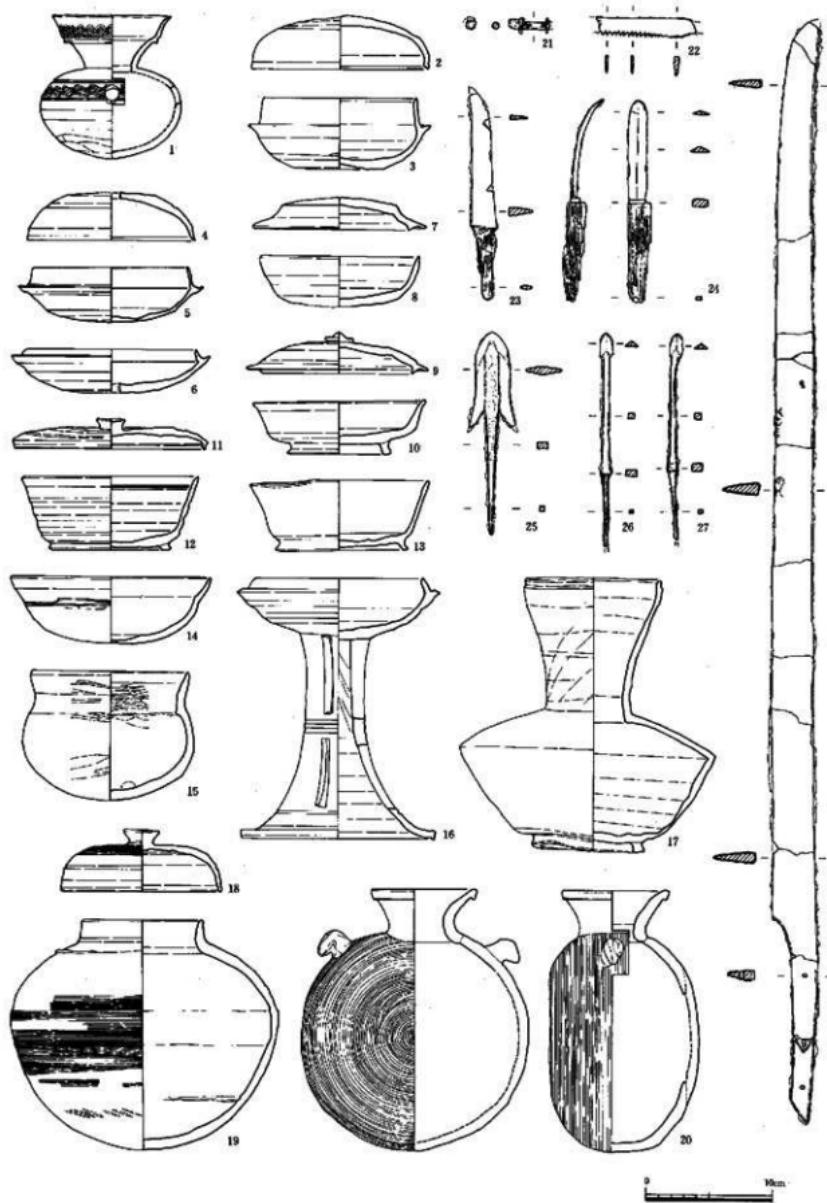


Fig.10 桑原石ヶ元古墳群出土遺物実測図 (1/4)

ら石が出土している。

本古墳群の築造年代は西端の支群が最も古く、5世紀中葉には築造が開始されたものと考えられる。その後、一時期古墳の築造は中断され、6世紀中葉になると南側の東西方向に延びる尾根上の17・19・21・22号墳が築造されたものと考えられる。以後6世紀後半から末にかけて、北側に派生する尾根を下るように造墓されたものと推定される。8世紀代までの追葬が認められるのは、

8・11・17・28号墳の4基である。

本古墳群を特徴づける遺物に、鉄製鍛冶工具一式をはじめとした製鉄関連の遺物がある。周辺で相次いで調査される律令時代の製鉄関係遺跡の存在などと関連して、古墳群の被葬者の性格や、この地域における鉄製産の開始時期などを考える上で貴重な資料といえよう。

Tab. 2 桑原石ヶ元古墳群各古墳一覧

古墳番号	規模	遺存状況	石室形態	内部主体			調査年度
				玄室長	奥壁幅	方位	
1号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	198cm	不明	S-31°-E	半壊
2号墳 (22m)	ごく一部遺存	横穴式石室		315cm	179cm	N-42°-W	半壊
3号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	210cm	180cm	S-45°-E	半壊
4号墳	13m	ごく一部遺存	横穴式石室	(220cm)	129cm	S-69°-E	比較的良好
5号墳	16m	地山まで削平	横穴式石室	(305cm)	(185cm)	S-60°-E	全壊
6号墳	21m	比較的良好	横穴式石室	(390cm)	(240cm)	N-80°-E	全壊
7号墳	17m	比較的良好	横穴式石室	(310cm)	(176cm)	N-32°-W	ごく一部遺存
8号墳 (12m)	地山まで削平	横穴式石室		254cm	192cm	N-42°-W	半壊
9号墳	18m	比較的良好	横穴式石室	244cm	158cm	N-73°-W	半壊
10号墳							古墳でないことが判明
11号墳	13m	一部遺存	横穴式石室	224cm	175cm	N-73°-E	比較的良好
12号墳	14m	一部遺存	横穴式石室	276cm	186cm	N-81°-E	比較的良好
13号墳 (6m)	遺存せず	横穴式石室		(170cm)	(105cm)	N-87°-W	床面のみ
14号墳	16m	ごく一部遺存	横穴式石室	(270cm)	(175cm)	S-78°-E	全壊
15号墳							古墳でないことが判明
16号墳							古墳でないことが判明
17号墳	14m	地山まで削平	横穴式石室	330cm	190cm	S-20°-W	床面のみ
18号墳 (8m)	地山まで削平	横穴式石室		165cm	(120cm)	S-15°-W	半壊
19号墳 (16m)	地山まで削平	横穴式石室		356cm	245cm	S-11°-E	一部遺存
20号墳	16m	ごく一部遺存	横穴式石室	(280cm)	(180cm)	(S-36°-W)	床面一部のみ
21号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	235cm	214cm	N-83°-W	半壊
22号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	248cm	(204cm)	N-89°-W	一部遺存
23号墳 (10m)	地山まで削平	横穴式石室	不明	不明	不明	ごく一部遺存	平成10年度
24号墳							古墳でないことが判明
25号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	不明	不明	不明	床面一部のみ
26号墳							古墳でないことが判明
27号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	不明	不明	不明	ごく一部遺存
28号墳	12m	地山まで削平	横穴式石室	256cm	166cm	S-82°-W	半壊
29号墳	12m	比較的良好	横穴式石室	209cm	137cm	S-13°-W	半壊
30号墳	8m	一部遺存	堅穴系横口式石室	(218cm)	(108cm)	N-47°-W	床面のみ
31号墳	11m	遺存せず	堅穴系横口式石室	(250cm)	(110cm)	S-8°-E	床面一部のみ
32号墳	8m	一部遺存	堅穴系横口式石室	(238cm)	(114cm)	S-24°-E	床面、小口の一部
33号墳	10m	一部遺存	堅穴系横口式石室	255cm	112cm	S-13°-W	比較的良好
34号墳	9m	ごく一部遺存	堅穴系横口式石室	273cm	127cm	N-5°-W	床面のみ完存
35号墳	8m	ごく一部遺存	堅穴系横口式石室	(280cm)	(98cm)	S-26°-E	床面の一部のみ
36号墳 (9m)	地山まで削平	堅穴系横口式石室		323cm	128cm	S-87°-E	床面のみ完存
37号墳	不明	地山まで削平	横穴式石室	不明	不明	不明	ごく一部遺存

() 内は推定値

第2次調査

調査地点は、大原川の左岸に形成された沖積地上ないしは、一部は砂礫台地上に立地する。調査面での標高は上流側では18m前後、下流側で15m前後を測り、現況は水田となっていた。なお調査中は、「桑原柿ヶ元遺跡1次調査」と呼称していたが、調査後の調査次数・遺跡名称の整理により元岡遺跡群第2次調査となっている。

第1次調査（確認調査）では、対象地区の一部について地表下20~100cmでの遺跡の存在を確認していた。調査はまず、構造を検出していいた試掘トレンチ周囲の表土を重機で除去することから開始した。なおこの時点では、現況の水田区画を維持する必要があったため、畦畔を残して調査を行っている。したがって水田区画によって1~7区の任意の調査区を設定した（図1）。

各区の検出構造は以下の通りである。

- ・1区：水田（平安時代？）、井戸（時期不明）
- ・2区東半：水田（平安時代）、下層に古墳時代～奈良時代の遺物包含層
- ・2区西半：遺物包含層（上層＝古墳時代前期、下層＝縄文時代晚期）、溝1（古墳時代？）、掘立柱建物5（1×1間、古墳時代前期か）、柱穴多数

- ・3区：遺物包含層（古墳時代後期～奈良時代）、溝2、（奈良時代）、落ち込み（土器溜：上層＝弥生時代後期～終末、中層＝弥生時代中期前半、下層＝縄文時代晚期）、柱穴
 - ・4区：土器溜、遺物包含層、旧河道（いずれも古墳時代前期）、土坑
 - ・5区：水田（平安時代）
 - ・6区：水田（平安時代）、土器溜、土坑（平安時代）
 - ・7区：遺物包含層（上層＝弥生時代後期～古墳時代前期、下層＝縄文時代後期～晚期）、土坑2（縄文時代晚期、ドングリピット）
出土遺物は、縄文時代から平安時代までの土器類、縄文時代の石器、奈良時代の鉄滓、縄文時代の堅果類がある。総量はコンテナ35箱分である。
- 調査地は昭和40年代の大規模な圃場整備により地形が大きく改変され、遺跡の遺存状況は良好ではなかった。しかし、縄文時代以降の連続と続く生活の痕跡をたどることができた。7区の縄文晚期の土坑はいずれも最下層より木の実が山上し、堅果類の貯蔵施設と考えられる。また4区では古墳前期の土器に伴い、韓国南部系の陶質土器が出土した。また3区の土器溜では、本調査の遺物量の半分以上に及ぶ弥生土器が出土している。

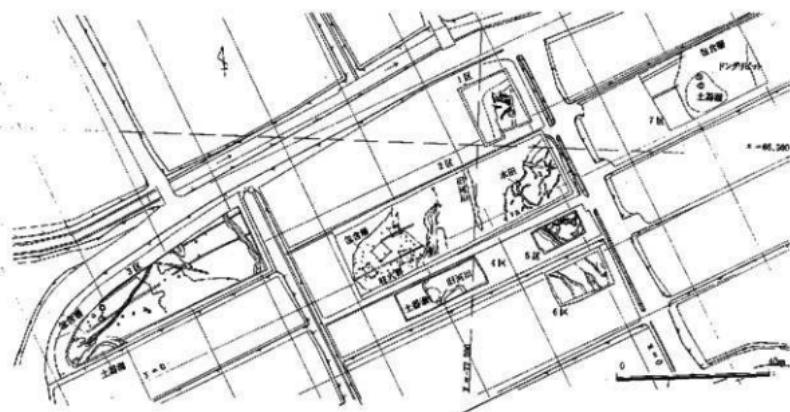


Fig.11 第2次調査全体図 (1/1200)

第3次調査

調査地点は石ケ元古墳群が立地する丘陵の南側斜面に位置する。前面には東側に開口する狭長な谷がある。標高は13~19 mを測る。調査は厚さ約30~60 cmの表土を除去した後の黄灰色粘質土を遺構面として行った。この遺構面では弥生時代中期の堅穴住居跡9軒以上、掘立柱建物跡、土坑、柱穴、6世紀代の円墳1基を検出した。また、この遺構面より約1~1.5 m下層で縄文時代早期の文化層を確認した。

縄文時代早期の文化層は花崗岩の基盤に堆積した礫層の上面に形成されている。厚さ50cm~150cmを測る。土層観察から文化層は3~4層に分けることができる。検出した遺構は集石遺構33基(内、11基は焼石の礫群)、炉穴1基、焼土面数基等である。

集石遺構は調査区の西側に多く分布する。集石遺構は炉と考えられるが、形態からいくつかのタイプに分けることができる。石圓いをもつもの(034、045)、浅い掘り込みに人頭大の礫を充填したもの(042)、掘り込みの中に炭化物が多量に詰まり、そこに礫が数個立てられたもの(024)等がある。炉穴050(連結土坑)は調査区西端にあり、平面形はひょうたん形を呈し、先端に向かって土坑の底が上がっていく。窄まった側の壁の上面が被熱で赤変している。埋土には炭粒子が含まれる。それらのC14年代測定でBP9120±45の数値(補正)が得られた。長さ140cm、幅80cm、深さ35cmを測る。炉穴は南九州で多く発見されているが、北部九州では検出例は少なく、貴重な発見と言える。

遺物は層位的に幾つかの時期に分けることができる。I期(2層)は押型文土器の時期である。

II期(4・5層)は撚糸文土器、刺突文土器、条痕文土器の時期で、今回の調査では量的にもっとも多い。石器は石鎌、石槍、磨石、石皿等がある。III期(6層)は条痕文土器を主体とした時期で、量的には少ない。旧石器時代の遺物も出土している(ナイフ形石器、剥片尖頭器、細石刃核等)。

弥生時代の堅穴住居跡は斜面を造成して掘り込まれている。斜面の下側は削平されている。堅穴住居跡の平面形は方形もしくは隅丸方形を呈する。全体に遺構の遺存状態は悪く、壁溝と主柱穴のみのものが多い。そのため、構造に不明確な部分が多いが、主柱穴の配置から二つのタイプが見られる。SC005は調査区東側に位置し、SC003を切る。削平のため、全体の半分程度しか遺存していないが、1辺10m前後の大型の住居跡である。主柱穴は壁際に沿って、桁行3間を検出した。梁行は削平されているが、2間と推測される。SC008、015、016も同様の構造になると考えられる。一方、SC002、003、019は1辺6m程度で、主柱穴は4本と推測される。中央には地床炉が配置される。遺物は住居内に廃棄された状態で、弥生土器(甕、壺、高杯、器台)、石製品(石斧、石錘)等が多量に出土した。堅穴住居跡の時期は弥生時代中期後半に限られ、この時期に谷部の開発等を目的とした集落と推測される。

調査区の西側で検出したSO02は主体部に横穴式石室を持つ円墳である。墳丘は削半のため、ほとんど遺存しておらず、周濠が残るのみである。周濠の内側の直径で約8mを測る。石室は天井石と壁石の大半が抜き取られ、奥壁と側壁の腰石が残るのみである。底道部も削平されているが、南側に開口すると想定される。奥壁幅1.8m、現存長2.5mを測る。床面にはこぶし大から人頭大の礫が敷かれる。敷石は初葬時の床面に更に礫が積み上げられており、2回以上の追葬があったと考えられる。遺物は石室から須恵器(杯、壺)、土師器(甕、高杯、蓋)、耳環が出土した。また、周濠から破砕された須恵器甕、壺等が出土した。古墳の時期は6世紀中頃~後半と考えられる。

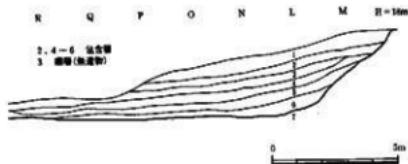


Fig.12 第3次調査地点1号墳積石圖(1/200)

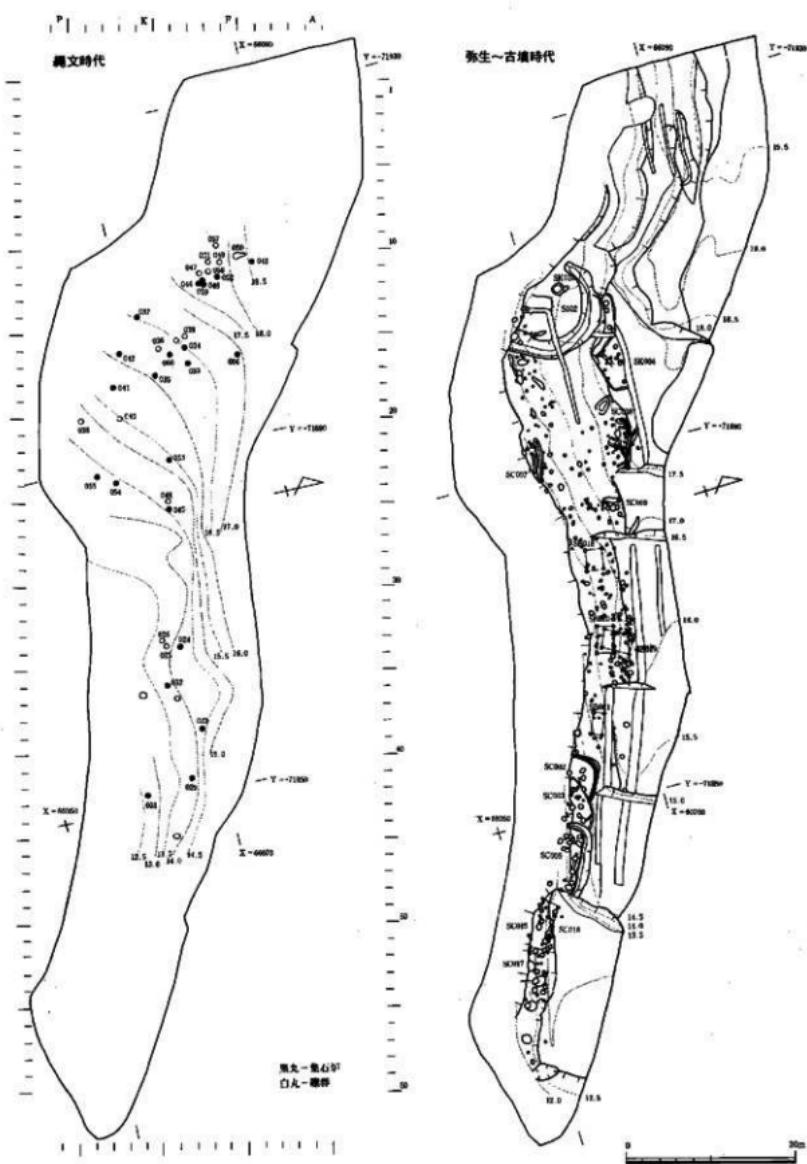


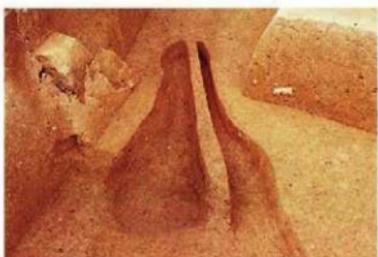
Fig.13 第3次調査全体図 (1/600)



Fig.14 包含層出土縄文土器実測図 (1/3)



Ph.13 第3次調査全景（西から）



Ph.14 炉穴 050 完掘（南から）



Ph.15 石組炉 034 完掘（北から）



Ph.16 石組炉 056 完掘（南から）



Ph.17 垂穴住居跡完掘（南から）



Ph.18 SO02 遺存状況（北から）

第4次調査

調査地点は、桑原石ヶ元古墳群が立地する丘陵の、北側に伸びる櫛歯状小支丘に挟まれた谷頭部分に当たる。花崗岩風化岩からなる地山の谷部に青灰色シルト層が堆積している。遺跡はこの谷頭部分地山を削り出し、またシルト層上面に埋立地業を行って平坦面を造ったものである。調査区は大きく3段の平坦面に分かれ、上段からテラスⅠ～Ⅲと呼ぶ。

テラスⅠは地山削平の平坦面であるが、特段の遺構は認められない。

テラスⅡは谷頭部分の地山を一部削り出し、シルト上面に最大1mの盛り土をした平坦面である。埋立は3回に分けられており、3列の捨て石列が谷頭を取り囲むようにアーチ状に置かれている。遺構は平坦面周辺部の段落ち部分を中心に検出されている。主な遺構は段落ち際に雨落ち溝をめぐらす、厩（ウマヤ）と思われる掘立柱建物3棟、南東側段落ち部をめぐる溝である。その他、柱穴群、埋立段階で焚かれた地床炉数カ所がみられた。これらの遺構は遺物の上から、室町時代（14世紀半ば）の極めて限られた時期のものと思われる。

テラスⅢは、谷の一部を土手状の築堤によって堰き止めた平坦面であり、明確な遺構は伴わないが、遺物量は少ないものの薄い包含層がみられる。中世遺物に混じって、奈良時代・古墳時代の遺物も含まれる。鉄滓もみられた。

本調査地点では、室町時代を主体とする中世遺物が、テラスⅡの埋立整地層を中心に出土している。土師器皿、瓦質陶器、滑石製石鍋、瀬戸天目碗、鉄製刀子、鉄滓等の国産品に混じり、中国製の青磁、白磁、陶器碗、皿、壺等が相当量出土している。

北側に開析する谷頭という遺跡の立地条件、極めて短かい占地期間、遺物構成などから一般の中世集落とは性格の異なるものであろう。谷直上の石ヶ元古墳群は中世の段階で一部破壊されているが、その破壊された石室からも同時期の中国製陶

器が多く出土しており、室町時代に所在したという「元岡城郭」に関連する遺跡と考えられる。



Ph.19 第4次調査全景（北から）



Ph.20 テラスⅡ全景（北から）



Ph.21 テラスⅡ埋め立て捨石1～3列（北から）

第5次調査

調査地点は南北を石ヶ元古墳群から派生する低位な丘陵に挟まれた、丘陵斜面から谷部にかけて位置する。第3次・第7次調査の谷上流部にあたり、標高は33m~400mを測り、現況は階段状に蚕枠園造成がなされている。調査地点の北側の丘陵頂部には石ヶ元古墳群の第21号~23号墳が立地する。

調査地点は開墾時の造成により大きく削平を受け以降の遺存状況は著しく悪い。特に谷筋を除く南北の丘陵斜面は岩盤が露出するほどに地山の真砂土が削られ、平坦に造成されていた。

今回の調査で検出した遺構は丘陵斜面を削りだし、平坦に造成した整地面と土壤3基、古墳時代の包含層である。

整地面は調査区の北西斜面にあり、傾斜の高い面を削り「L」字の壇造成をすることにより平坦面を造作している。平坦面からは壁際がいくぶんかの窪みが観察されるほかには遺構もなく、遺物も出土していない。

土壤は西側の丘陵斜面の裾部から3基検出した。1号土壤は南北が膨らみを持つ隅丸長方形の平面をなす。規模は長軸1.8m、短軸1.33m、深さ0.55mを測る。床面は地形の傾斜に沿うように

西から東に緩やかな傾斜を示す。土層は1層が暗~黒、褐色土、2層は黒褐色土、3層は少し粘質を帯びた黄褐色土、4、5層は茶褐色土、6層は暗黄褐色土、7層黄褐色砂質土である。2号土壤は北側の隅が角張る隅丸長方形の平面形を呈すが掘り込みが浅い。規模は1号土壤とほぼ同規模で、長軸1.75m、短軸1.3m、深さ0.25mを測る。3号土壤は1.5×0.7mの長楕円形の皿状を呈する。包含層は谷部に確認できた。遺物は土壤と同様に須恵器・土師器の小破片が出土しているだけで詳細な時期は不明。



Ph.22 第5次調査全景（南から）

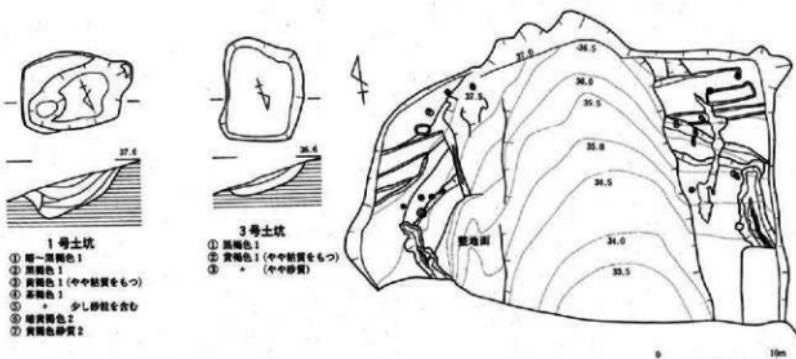


Fig.15 第5次調査全体図 (1/400) 及び土坑実測図 (1/80)

第6次調査

調査地点は5次調査地点と丘陵を挟んでその西側に位置する。南北を低位丘陵に挟まれ谷部にあたり北側の丘陵頂部には石ヶ元古墳群の25号墳～35号墳が占地する。標高は22m～24m前後を測り丘陵裾から谷部となる。現況は平坦となり、数枚の畠地となっていたが、本来の地形は北から東、南を低い丘陵に囲まれ、西側に開く深い谷部になっていたものであろう。

今回の調査は谷部の調査とその南側丘陵部にある石ヶ元38号墳（仮称）の調査である。

古墳の調査は墳頂部と考えられる、最も高い部分と周溝にある部分に幅1.5mのトレチを設定して調査を実施したが花崗岩の岩盤の上には風化された土壌の二次堆積土であった。古墳ではないことや他に遺構や遺物が出土しないことが判明したので、この部分についてはこれ以上の調査を実施しなかった。

谷部は開墾時の造成により丘陵裾部は大きく削平を受け遺構の遺存状態は良好ではない。今回の

調査で検出した遺構は丘陵裾部のピット群と丘陵裾と谷中央部を流れる流路、及び古墳時代の包含層である。丘陵裾の流路は幅1.5m前後で断面「V」字状、覆土は砂礫層である。遺物は土師器の小破片だけであるが時期的にはもっと下がるものであろう。谷部からは包含層が確認でき、その下からピット群を検出したが規模も小さく、建物の復原には至らなかった。石ヶ元古墳群からの流れ込みの可能性が高い。



Ph.23 第6次調査全景（南東から）

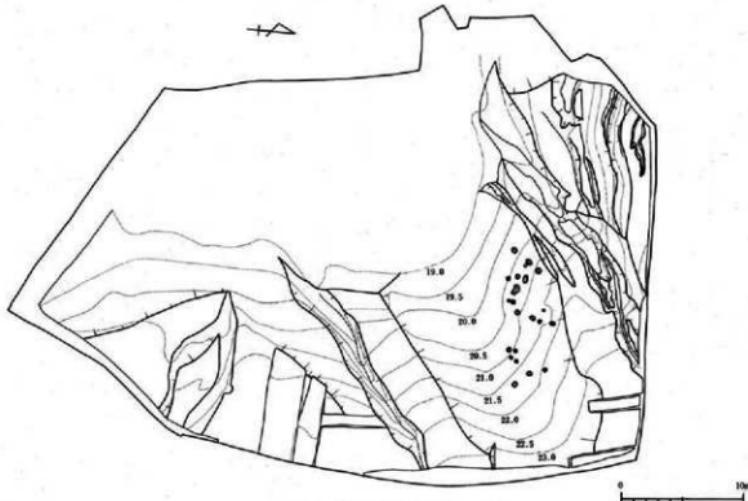


Fig.16 第6次調査全体図（1/400）

第7次調査

調査地点は池の浦古墳のある丘陵から北へ派生する二つの尾根に挟まれた谷地内にある。谷地は幅約60m、奥行き約200mを測る。その標高は20~40mである。この谷地には昭和40年頃まで棚田がつくられ、その後造成工事を経て蜜柑園が開かれている。昭和60年以降に農業は中止され、竹林と雑木林となっている。遺跡はこの谷の地下2~4mに埋没していた。

発見した遺構は主に古墳時代と古代であるが、出土遺物は古墳時代、古代を主体としながら、旧石器、縄文、弥生、中・近世の各時代資料がある。

その内容は以下の通りである。

旧石器時代は包含層は確認できなかったが、細石刃、剥片などが出土した。

縄文時代は西側斜面に包含層があり、柱穴などの遺構を少数検出できた。早期の押型文土器、石錐などや後期初頭の阿高系土器や石鏟、剥片などがある。

弥生時代は明確な包含層は確認できなかった。中期後半の須玖式土器や石器（石斧、石包丁、石

鎌、剥片）などがある。

古墳時代前期の遺物は古代の池状遺構の上部に流入状態で出土した。土師器、埴輪などがある。これは北東に隣接する池の浦古墳からの流入と考えられる。

古墳時代後期の主な遺構としては竪穴式住居跡6棟、掘立柱建物2棟などがある。遺構は谷の両側斜面に分布するが、竪穴式住居跡1棟のみ東側斜面にあるほかは全て西側斜面に分布する。西側斜面



Ph.24 第7次調査全景（北から）

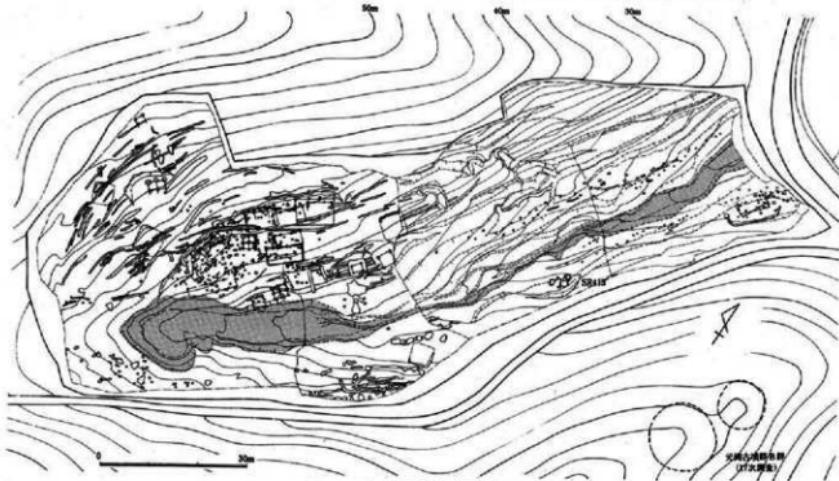


Fig.17 第7次調査全体図 (1/1,000)

面の下位にある住居 2 棟にはカマドが付設され、斜面上側に排水用の溝が掘られている。この時期の遺物としては土師器、須恵器、鉄器（鎌）などがある。

古代は飛鳥時代から平安時代初期まで及ぶ。主な遺構としては掘立柱建物 18 棟、横列 5、焼土塙 18、製鉄（精錬）炉 6 基、鍛冶炉 16 基、道路状遺構 1、池状遺構 1、横列二条、柱穴多数などがある。建物群は西側斜面に大規模な造成により設けられた平坦面上で検出した。造成面は斜面側を削り、谷側を埋め立てて大きく三段の平坦面を確保している。斜面側の盛土は後世の削平などで失われているために、建物の柱穴は掘り方の深い純柱建物以外は斜面側の片側のみ遺存している。また、建物を復元できない柱穴も多い。建物は桁行 4 ~ 5 間を最大とするが、規模は小さい。また、ほとんどに切り合ひ関係があり、少なくとも 3 回の建て替えがあったと考えられる。製鉄遺構の多くは谷部の埋没が進み始めたあとに、整地をともない設けられている。炉は何れも小型の箱形炉であり、炉底部の両端に廐滓壙が付設する。周囲に覆屋跡と見られる柱穴 4 が付設している例が 2 基あった (Fig.18)。鍛冶炉と見られる遺構は、浅い焼土塙であり、床面が硬く焼け、炭化物、灰、焼土、鐵滓などが充填している。鍛造跡が検出できた例もある。谷奥部に設けられた池状遺構は、長さ約 40m、幅約 10m、深さ約 2m の規模であり、壁面は急角、底面は平坦に掘削されている。池内の岩脈の割れ目から湧水が噴出していた。この遺構内から多くの木製品を出土した。特に下層から底部にかけて 3 点の木筒が出土した点は注意される。焼土塙は斜面の各所にあり、平面略三角形を呈する。長さ 1 ~ 2m、幅 1m 以下であり、壁面は垂直で硬く焼け、その上部に粘土を貼り焼面が重層する例があった。遺存する深さは 0.5m 以下である。床面には炭化物片が薄層をなす。道路状遺構は建物群東側にはじまり西側斜面を北側に向かって 50m 程検出された。斜面を段状に削平し、断続的であるが両側に側溝を設けている。一部で硬化面が観察できた。道路幅は側溝中央間で約

2.7m を測る。横列は道路状遺構と重複し、自然地形に沿って蛇行している。遺構の時期は飛鳥時代から奈良時代を主とするが、建物には一部平安時代に下る例を含む。厳密な時期比定は報告書に譲りたい。

この時期の遺物には土師器（墨書き器含）、須恵器（硯、鏡書き器含）、瓦、石製品（椎、石鍋、紡錘車、砥石）、鉄製品（鎌、刀子、鎌、釘）、木製品（木筒、皿、槽、曲物、箸状、弓状、棒、簀串、鳥形、鎌、火鍶臼、鞍骨、建築材、杭など）、装身具（玉、櫛）、製鉄関連遺物（鉄塊、鐵滓、炉壁、羽口等）等がある。

以上のうち池状遺構から出土した遺物を一部紹介する。遺構下部では須恵器壙 (Fig.19-1~6)、土師器壙 (同-7)、中空円面鏡 (同-11)、木筒 (Fig.20-1~3) などがある。なお硯片はほかに 2 個体が出土している。木筒を含む木製品類は池状遺構の底面に近いものが水分の影響で保存されて

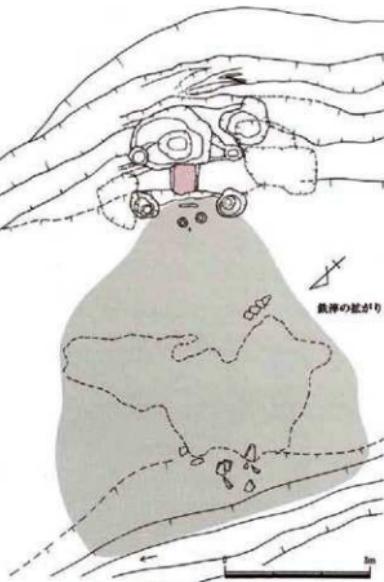


Fig.18 製鉄炉 SR413 実測図 (1/100)

いた。浅い位置にあった木製品は痛んでいる。この遺構底面や下部の包含層には、より古い時期の須恵器坏類 (Fig.19-8.9) や土師器碗 (同-10)なども出土した。

中・近世には斜面に溝が掘られている。一部に水口や畦畔状の遺構が検出された。この時期以降には小規模な水田が経営されたと見られる。土師器、瓦器、陶磁器類が少量出土した。

本地点の遺物は総数でパンケース約 500 箱である。

池状遺構から出土した 3 点の木簡は出土層から 8 世紀前半以前の遺物と考えられた。このうち 1 号木簡 (Fig.20-1) は一部を欠損するが、荷札形式であり、「壬辰年韓鐵□□」と墨書がある。干支である「壬辰」年は出土層や書式から持続 6 (692) 年と考えられる。2 号木簡 (同-2) は長さ 50cm

を越える長大な木簡であり、墨書は不明瞭ながら「里長」「鷺里」などが読まれる。3 号木簡 (同-3) は両端を欠失し、内容は不明である。

さて、こうした木簡や硯、棒、瓦などの出土品、大規模な造成を伴う遺構群のあり方などから、本地点はある期間に何らかの公的施設として利用されていたと考えられる。しかし、同時並存する建物は多くても 4 ~ 5 棟であり、狭い谷地のために有効に利用可能な土地は少ない。この遺構群の性格について現時点では明らかにし難い。とはいっても検出された製鉄関連遺構と合わせてみると、律令初期における本地域の生産活動、行政組織の検討に貴重な資料となるものである。

(参考文献)

吉留秀敏「元岡遺跡群」「木簡研究」21 木簡学会 1999.11

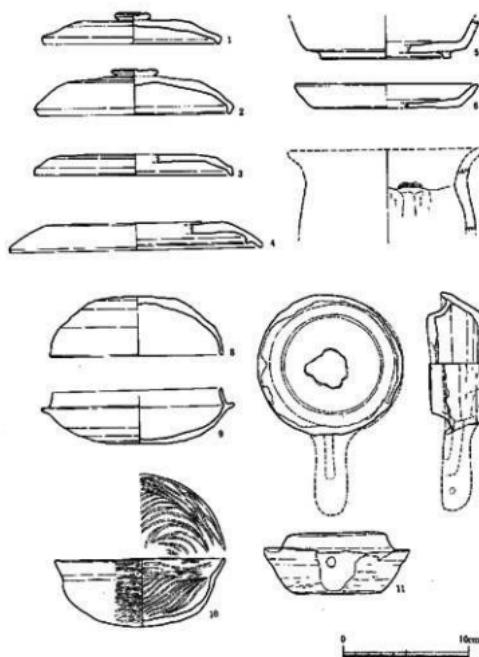


Fig.19 出土遺物実測図 1 (1/4)

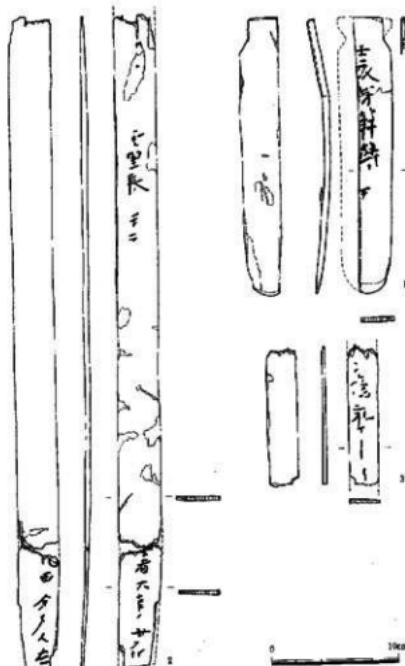


Fig.20 出土遺物実測図 2 (1/4)

第8次調査（元岡古墳群M群）

調査地点は石ヶ元古墳群が展開する丘陵から南東に派生する丘陵の先端部に1基だけ独立して所在する。

古墳は丘陵頂部のほぼ中央部に位置し、墳丘の遺存は良好であるが古墳の中央部を東西に貫通する規模の擾乱（福岡城築城時の石抜きであろう。）により石室基底部まで破壊され東側の側石だけの遺存である。

古墳は二段築成であるが全体に不整形で地形に沿い長辯円形を呈している。一段目は盛土ではなく、地山を削り出すことにより墳形を整えている。規模は南北 28.3 m を測るが、東西長は現況で 14.5 m を測るが、開墾により大きく削平を受けている。二段目は地山削り出しと盛土よりなる。南北 16.7 m、東西 14.0 m を測り、ほぼ円形である。高さは 2.3 m 前後を測るが、封土の厚さは 1.7 m に過ぎない。盛土は基盤層の赤褐色土と黒褐色土の互層で板築状となるが軟質である。石室は近世の石抜きにより石材はほとんど残っていない。南側の側壁 1 枚とその部分の床石が僅かに観察されたに



Ph.25 第8次調査石室全景（北から）

過ぎない。石材の抜き跡から大まかに、その構造が理解できる。主軸を東西方向にとり、西方に開口する両袖の横穴式石室である。全長 6.28 m、玄室幅 1.84 m、玄室長 2.83 m、羨道部幅 0.75 m、羨道部長 3.45 m を測る。石室の掘り方、石材の剥落した跡から奥壁 2 枚、側壁 3 枚の大振りな石材を使用していたことが推測される。出土遺物は羨道の南側に拳大の礎と伴に出土しているが、石室から搔き出した二次的な堆積である。時期は出土遺物から 6 世紀後半と考えられる。

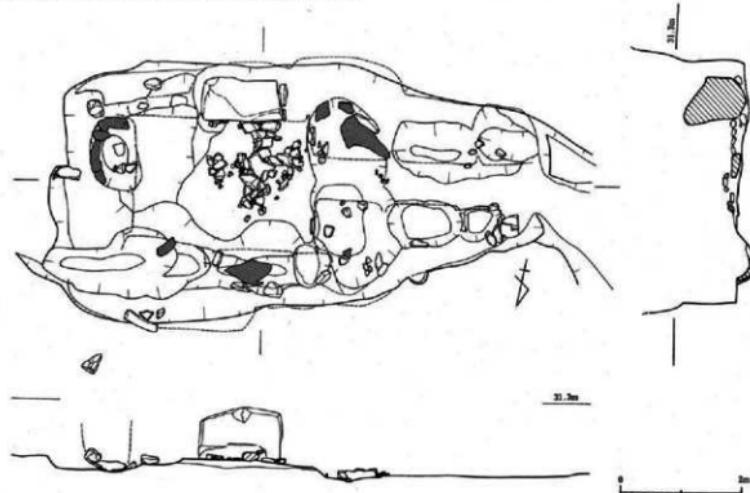


Fig.21 第8次調査石室実測図 (1/80)

第9次調査

調査地点は、元岡池ノ浦古墳から西側に派生する標高30~40mの舌状丘陵上に立地する。調査期間は平成10年11月2日~同年12月10日で、調査面積は190m²であった。調査は1区、2区の2カ所に分けて行った(Fig.22)。

平成8年の踏査では、周辺の地形や石材が散乱する陥没坑などから、5基の古墳を予想した。しかし、実際の発掘調査では古墳に伴う遺構や遺物は全く確認されず、これに代わって、1区では近世の墓壙が、また2区では弥生時代の竪穴住居址が検出された。

1区では改修済みの近世墓壙4基を検出した。内1基には、陶製の甕が遺存しており、底部から銅鏡、銅製煙管、染付碗などが出土した。またここは元岡称念寺の旧墓地で、周辺から同寺七世住職(寛保2年卒)の墓石が出土した。

2区の竪穴住居址は2棟検出されたが、共に大きく削平され規模が判然としない(Fig.23)。遺存状況から、共に長方形プランを呈するものと考えられる。東側の2号住居址は一辺が290cmを測る。検出されたピットの位置から主柱は2本と考えられ、ベット状造構を持ち、壁溝が巡る。住居址内からは、弥生時代後期の年代を示す土器片がごく少量出土した。

調査地点からは、南側に二丈・前原方面から博多湾にかけての広い地域を眺望することができる。



Ph.26 第9次調査全景(東から)

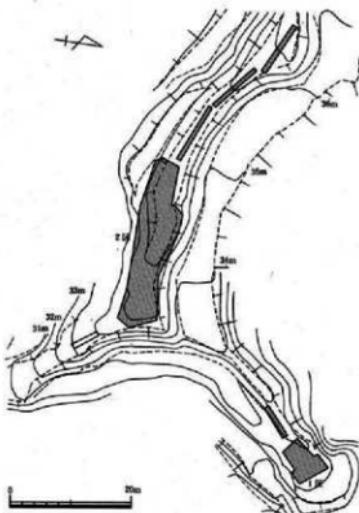


Fig.22 第9次調査位置図 (1/800)

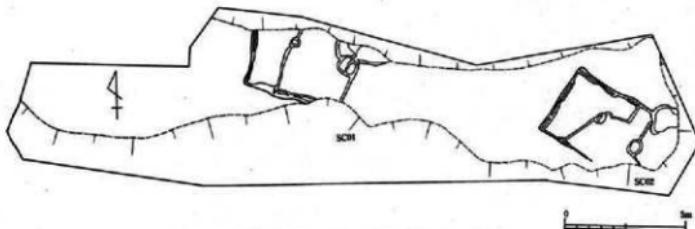


Fig.23 2区遺構平面図 (縮尺 1/200)

第10次調査

調査地点は大原川右岸の河川氾濫原に立地する。試掘調査で遺跡の存在が予想されたが、明確な遺構は検出されなかった (Fig.24)。

しかし、近代の溝からは以下の4点の石器類が出土した (Fig.25)。1はサヌカイト製の剥片と考えられる。長さ3.5cm、幅3.0cm、厚さ1.35cm、重量8.28gである。2はサヌカイト製で台形様石器の可能性がある。長さ3.15cm、幅2.5cm、厚さ6.5cm、重量4.85gである。3は黒曜石製の剥片尖頭器である。長さ6.6cm、幅2.4cm、厚さ0.9cm、重量13.01gである。4はサヌカイト製の局部磨製石斧である。長さ13.0cm、幅2.9cm、厚さ0.9cm、重量43.30gで、背面先端部に磨痕がある。1～3は後期旧石器時代、4は縄文時代創始期と考えられる。



Ph.27 第10次調査全景(東から)



Fig.24 第10次調査全体図(1/500)



Ph.28 出土石器

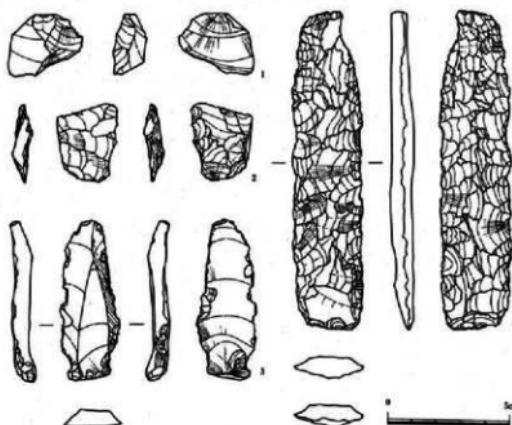


Fig.25 出土石器実測図(1/2)

第11次調査

調査地点は6次調査地点の西200mに位置する。大原川の上流にあたり、東西を低位丘陵に挟まれ、北に開く谷の上流部である。現況は南から北へ段々低くなる平坦な水田であるが丘陵裾部を削り谷部に埋めた結果であり、本来の形状は保っていない。標高33m前後を測る丘陵裾部から谷の沖積部にかけて調査を実施した。

今回の調査で検出した遺構は丘陵裾部から丘陵に直行する溝状遺構（おそらく自然の流路）3条、不整格円形の土壙1基、古墳時代後期の土器滬り、及び谷部の包含層である。土壙は規模が小さく 0.7×0.56 m、深さ0.1mを測る格円形を呈する。覆土には焼土を多く含み、木炭の小破片も僅かに含む。しかし土壙内面で被熱している部分はない。古墳時代後期の土器師の甕も破片が少量出土し、土器滬りと同時期の遺構である。土器滬りは丘陵の西側斜面の裾部に沿うような形で幅0.6m、長さ7.6m、深さ0.1mに確認した。あたかも溝状を呈しているが明瞭な掘り込みは観察できなかつ



Ph.29 第11次調査遺物出土状況

たので土器滬りとした。

おそらくは西側斜面の包含層が後世の水田造成により削平を受け、この部分の包含層が帶状に遺存し、遺物の分布が溝状になったものであろう。この土器滬りからは古墳時代後期の土器師や須恵器とともに「U」字状の鉄製鋤先、鐵鎌が各1点出土している。

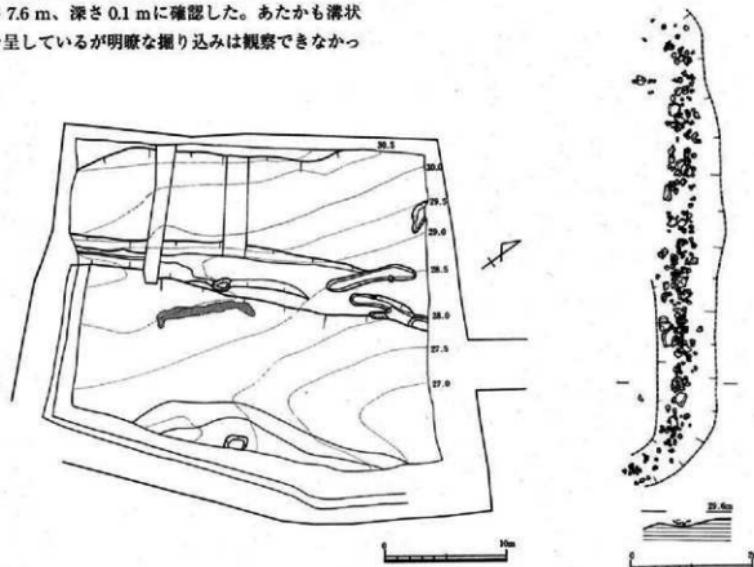


Fig.26 第11次調査全体図(1/400) 及び土器滬り遺物出土状況実測図(1/80)

第12次調査

調査地点は移転予定地の北側に位置する。この場所は以前、ミカン畑であったが、調査開始時は竹林になっていた。遺跡は東側に開口する、幅20~40 mの谷あいの北側斜面に営まれている。遺跡は畑の耕作土の下、2~4 mで発見された。

この調査で確認された主な遺構は製鉄炉跡で27基を検出した。この他、焼土坑5基、砂鉄充填の柱穴2基等がある。製鉄炉の形態は両側に廃滓土坑がつく箱型炉である。かは谷の北側の斜面を平坦に造成して、その場所に構築したと考えられる。南側斜面には炉は構築されていない。これらの分布は大きく3つの纏まりに分けることができる。かの配置は谷に対して、直行するもの(22基)と平行するもの(5基)がある。規模は幅30~80 cm、長さ40~130 cmを測る。かの側面に輪座と考えられる土坑が伴うものもある。かの形態は規模や構造等からいくつに分類(I~III類)される。

I類は谷に対して直行して配置される、炉内の幅40 cm程度の小型炉(027、028等)で、炉の側面に土壌を伴わない。炉の下部は焼土や炭を充填したのみの構造を呈する。II類は谷に対して直行して配置される、炉内の幅60 cm程度の大型炉(019、023等)で、炉の側面に輪座と考えられる土壌が伴う。炉の下部は充分焼きしめた後に焼土や炭を充填する構造を呈する。III類はII類と同様の規模、下部構造を持つが、谷に対して平行に配置される(024、030等)。また、輪座と考えられる土壌は伴わない。切りあい関係からI類からII類・III類への変遷が想定される。

炉の周辺には径2 m程の土壠がいくつか見られる。調査地点の表層地質は花崗岩の風化土で、か体用の土を採取したものと考えられる。

出土遺物は土器類(須恵器、上師器等)、製鉄関連遺物(炉壁、輪羽口、鉄滓等)、木製品(火鑓具、送風管、搔き出し棒等)等がある。

炉の前面の谷部には鉄滓や壇したが壁が廃棄されており、コンテナ箱で約5000箱以上が出土し

た。谷部の底からは送風に使用されたと考えられる木製の管が10数点出土した。この管は半裁した木の内側を削り貫き、合わせたもので、径約8~10 cm、長さ約60 cmを測る。管はいずれも一方が焦げている。箱形炉II類に見られる輪座とかの間隔が約60 cm程度であることから、これらの送風管はII類に伴うものと想定される。一般に送風管は土製のものがよく知られているが、今回の調査ではほとんど出土していない。また、この他、先端を鉄型に加工したものや先端を尖らせた棒状の木製品も出土しており、製鉄作業や炉の構造を復元する上で重要な資料と言えよう。

本調査地点では土器類の出土量は非常に少ない。谷部が鉄滓等で埋没した後の埋土には黒色土器A類などを見られ、9世紀代には操業していると考える。それぞれの遺構に伴う数少ない資料を見ていくと、1はN-3区044、045の南側廃滓土坑上面、2はJ-3区038北側廃滓土壙下層で出土した壺蓋である。3はM-2区024西側廃滓土壙、4はL-3区030北側廃滓土壙上面、5はL-3区019輪座で出土した須恵器壺身である。これらの土器から製鉄炉の操業時期は8世紀前半(中ごろ)から後半で、最盛期はII類・III類の炉の時期と考えられる。

また、本調査地点に隣接する15次調査地点で木筒が出土した。出土した場所は12次調査から連なる谷部の最下層で、木筒には「祓(解除)」の儀式に用いる「祓具」が記載されていた。共伴遺物や木筒の書式等から奈良時代に位置づけられるもので、製鉄工房造営にあたって行われた「祓」に関連したものとみられる。

糸島半島(志摩郡)では古代の製鉄遺跡が多数発見されているが、これまでには数基ほどの小規模なもので、今回のような27基ものの製鉄炉跡が発見されたのは初めてである。また、本調査地点では製鉄炉以外の遺構はほとんどなく、砂鉄原料から鉄素材を造るまでの工程を扱っていたと考えられる。これらに伴うと考えられる炭窯や鍛冶遺構等は検出されていないことから、今後の周辺の調査が期待される。

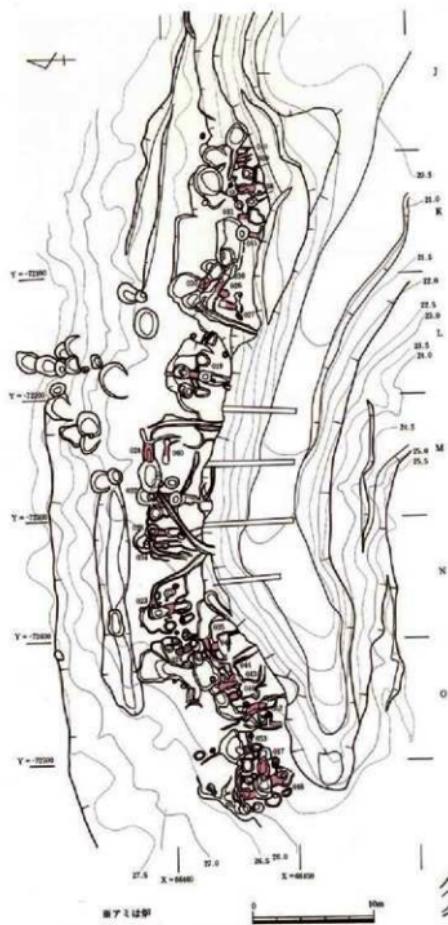


Fig. 27 第12次調査鉄鉢分布図(1/400)

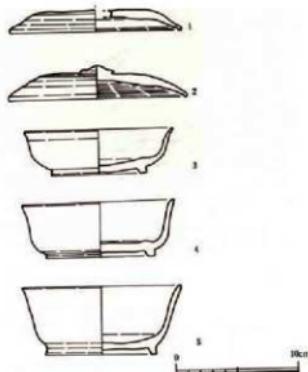


Fig. 29 整地層出土物実測図(1/40)

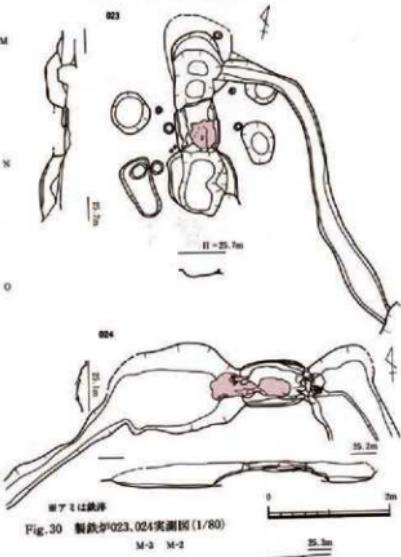


Fig. 30 製鉄炉023.024実測図(1/80)

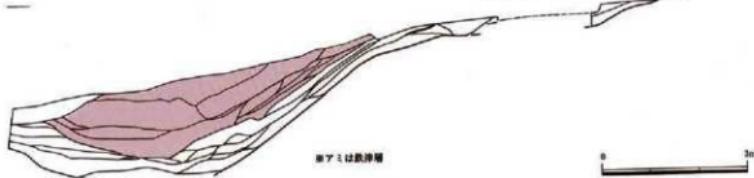


Fig. 28 谷底土層堆積実測図(1/100)



Ph.30 第12次調査全景（西から）



Ph.31 製鉄炉分布状況（南から）



Ph.32 製鉄炉023完掘（北から）



Ph.33 製鉄炉024完掘（東から）



Ph.34 谷部鉄滓堆積状況（東から）



Ph.35 製鉄炉019出土須恵器（東から）



Ph.36 谷部鉤形木製品出土状況（北から）



Ph.37 谷部木製管出土状況（東から）

第13次調査（元岡古墳群E群）

調査地点は、金比羅山より東に延びる丘陵から、更に南に派生する標高60m程度の舌状丘陵上に立地する。踏査では、本地点とここより北西の尾根の2カ所に各々1基の円墳の所在が推定された。しかし調査の結果、北西の尾根側は古墳でなく、本地点の推定地は前方後円墳（1号墳）となり、新たに円墳2基（2・3号墳）が検出され、計3基の古墳群と判った（Fig.31）。

古墳群は、近世の墓地及び近代の果樹園の造成で大きく破壊されている。このため、墳丘規模や内部主体の構造について不明な点が多い。

1号墳の墳丘規模は全長35m、後円部径22m、

前方部長15mと推定される。地山削り出しによる整形後、墳頂部には一部薄く盛り土を施す。前方部・後円部共に2段築成と推定され、葺石等の外表施設はない。墳丘の主軸方向は、遺存状況より明確にできないが、N-28°Wと推定される。また、細い尾根上を占地する地形上の制約から、墳形に歪みが生じ全体に狭長である。内部主体は木棺直葬の粘土棺と考えられるが、遺存状況が極めて悪い。地山の直上に薄く貼られた灰白色の粘土が長さ80cm程度遺存し、その上に赤色顔料が僅かながら確認できた。

2号墳は直径13mの円墳である。東半の墳丘は削平されて遺存しない。1号墳側に馬蹄形溝を巡らし、下層の3号墳を取り込んで墳丘を構築し

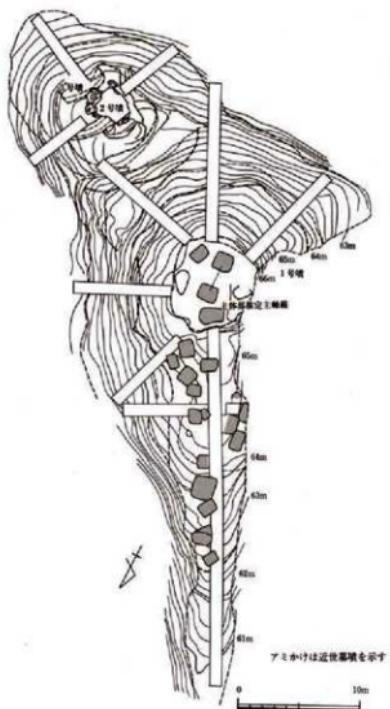


Fig.31 元岡E-1・2号墳墳丘遺存状況及びトレンチ位置図(1/400)

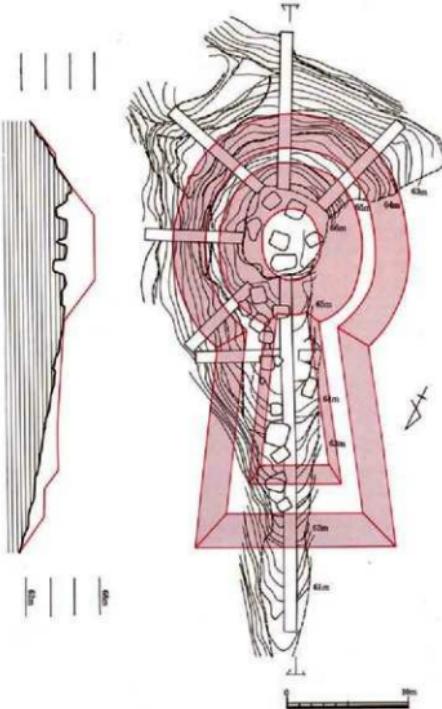


Fig.32 元岡E-1号墳墳丘復元図(1/400)



Ph.38 第13次調査全景（南西から）



Ph.39 1号墳出土方格T字鏡

ている(Fig.33)。内部主体は横穴式石室であるが、敷石は一部を欠き側壁は腰石の一部を留めるに過ぎない。石材には花崗岩の転石と割石を用いる。石室主軸はN-64°-Wで、丘陵側に開口する。一辺約270cmのやや耐張り気味の正方形プランを呈すると推定される。床面は3面確認された。袖石は横位に置かれ、羨道は約115cmと短く「ハ」の字形に開く。

3号墳は直径9.4mの円墳である。墳丘は地山整形後に盛り土されるが、2号墳の造営で大きく破壊される。周溝は内部主体を中心に関状に巡るが、東半は削平のため遺存しない。内部主体は主軸をN-17°-Eにとる割竹形木棺直葬の粘土櫛で、木棺長198cm、幅56~60cmを測り、北側が僅かに広い。墓壙を掘削した後、砂質土で棺台を築き、棺身と棺蓋を粘土で3回にわたって固定している。主体部に副葬品ではなく、ごく少量の赤色顔料が確認できた。

近世墓は1号墳の墳丘上に21基検出された。いずれも標石は遺存せず、墓壙のみ検出された。

1号墳主体部からは、青銅製方格T字鏡1面が出土した。面径9.4cmの小型鏡である(Ph.39)。2号石室には鉄製農耕具(鋤先・斧・鎌)や武器(鎌)など、また碧玉製管玉、ガラス製小玉などの装身具類が副葬されていた。周溝には、須恵器(壺・平瓶・大甕など)や土師器(壺)などが供獻されていた。3号墳周溝からは布留式の壺、甕が出土した。甕の内部には赤色顔料が詰められており、周溝内埋葬の可能性が考えられる。また、近世墓からは人骨やカワラケ、唐津、高取系の施釉陶器などが出土した。

2、3号墳の築造年代は、出土した土器の年代観からそれぞれ4世紀代と6世紀前半と考えられる。1号墳の出土遺物は青銅鏡のみで、築造年代を明確にしえないが、下の3号墳の築造より若干古いと考えられる。

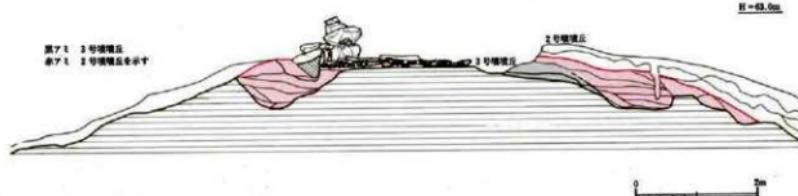


Fig.33 2・3号墳墳丘断面図 (1/80)

第14次調査

調査地点は11次調査地点とは尾根を挟んでその西側、直線で約100mの位置にあり、大原川の湧水点「幸ノ神」の東側にある。東西を低位丘陵に挟まれ、北西に開く谷の下流部である。現況は南から北へ段々低くなる平坦な水田であるが丘陵裾部を削り谷部に埋めた結果であり、本来の形状は保っていない。標高は約30m前後を測り、丘陵裾から谷部に位置する。試掘調査では土師器等が出土し古代の集落が予想されていた。調査の結果、東側の丘陵斜面から径10~30cmのピット、谷部からは少量の古代の土器が出土した。包含層は丘陵の斜面部には認められず、谷中央部の幅10mの範囲にほんの少量確認できた。現地表面からの深さは2.5~3.0mを測る暗黒褐色土や茶褐色土層からの出土である。ピットは傾斜面にあ

ることから後世の削平により消滅していることを考慮しても数が少なく強い傾斜面に掘り込まれているので掘立柱建物を想定するには無理がある。全体の遺物も少量で、小さな破片しか出土していないことを考えると、集落は別の地点にあるものであろう。



Ph.40 第14次調査全景（北から）

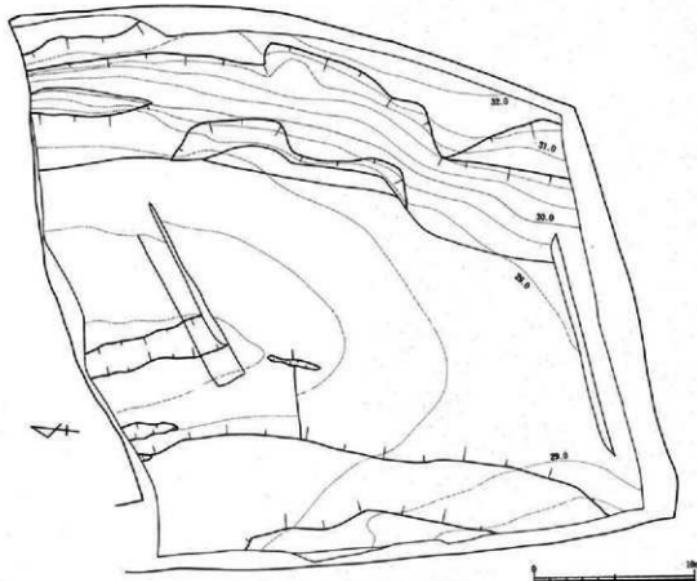


Fig.34 第14次調査全体図 (1/300)

第15次調査

調査地点は、糸島半島では代表的河川である大原川中流北岸の低地と小谷の前面部分にある。標高は12~22mを測る。西側に接する第12次地點は大原川に開く小谷にあり、奈良時代前半期の大規模な製鉄炉群が検出された。

検出遺構は古墳時代前期の土壙、古代末~中世前期の水田遺構がある。

古墳時代前期の土壙は湧水点付近にあり、下流側に杭列を伴う。古式土師器や木製農工具などが少量出土した。

古代末~中世前期の水田遺構は調査区東側を中心に畝畦、溝、石垣、杭列などを検出した。大原川沿いの低地や谷部を造成し、山際に溝(用水路)を設け、谷側の低い水田に給水したと考えられる。



Ph.41 第15次調査全景(東から)



Ph.42 水田跡検出状況(東から)

用水路は3条以上あり、切り合いも認められることから造り替えがあったと見られる。石垣はこの用水路が小谷を横切る部分の下方に構築されている。これは用水路の補強と水田の補強を意図していると考えられた。水田面は調査区東側で確認で

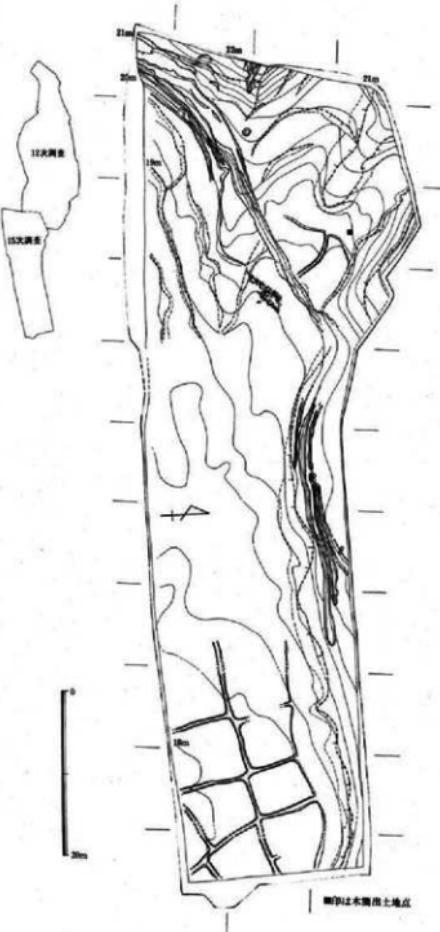


Fig.35 第15次調査全体図 (1/600)

きた。畠畦は水田床面での確認である。田面は50~80 mと小規模で、11面を検出した。田面間が隅角で接する型式であり、田越しの水利形態を知ることができる。水田関連遺構から土器、瓦器、輸入陶磁器、石製品（石鍋、砥石）、木製品（曲物、棒、杭）などが出土した。この水田床面下には古代の遺物包含層があり、製鉄に関連する鉄滓、炉壁と土師器、須恵器などが出土した。なお、12次調査地点に近い包含層の下部から木簡1点が出土した（Ph.43）。他に本来の包含層を避離した旧石器、縄文、弥生、古墳時代の遺物も出土している。

本調査地点の遺物は総数でコンテナケース80箱ある。

古代の包含層から出土した木簡は折散の底板を転用したもので、十数点に破断していたが、ほぼ全て接合した。現状で長さ45 cm、幅6 cm、厚さ0.5 cmを測る。小谷上部から流入堆積した鉄滓、焼土などが被覆しており、その埋没時期は12次調査地点の製鉄遺構が稼動する直前と考えられた。木簡は本来の半分程度の遺存とみられるが、片面に三行約70文字が読みとれる。その内容は古代の「解除（祓）」に関連するものであり、次のように軽読できる。

〔凡人言事解除法 進奉物者 人方七十七隻 馬方六十隻 須加… 水船四隻 弓甘張 矢冊隻 五色物



Ph.43 木簡出土状況（西から）

十柄「□□多志五十本」「赤五百口 立志玉百口」「□□二柄 酒三口…」「米二升 果木二口」「□木八束…」

このように祓に用いる祓具の品目と数量を記している。祓具は記載分だけで15種類に及び、それぞれの数量も多い。またこのうち6品には合点が付されている。こうした内容は大祓などの公的祭儀を想定させるが、出土状況は12次調査地点で確認された大規模な製鉄事業の開始直前に廢棄されたことなどから、これに関わる儀礼に伴うものと考えられる。何れにせよ律令初期に地方で行われた祭儀についての重要な資料となるものである。

（参考文献）

吉留秀敏「元岡遺跡群」『木簡研究』22 木簡学会 2000.11



Ph.44 木簡

Fig.36 出土遺物実測図(1/4)

第16次調査

調査地点は造成地内の西寄りの位置にある。東から南、西を低位丘陵に囲まれた北東に開く谷部のいわゆる谷頭に立地している。今回の地点は周囲を山に囲まれ、眺望の利かない、隔絶された環境である。標高 50 m 前後を測る丘陵裾部から谷の沖積部にかけて調査を実施した。

試堀調査では焼土、木炭とともに柱穴を検出したことから、生産遺跡に係わる木炭窯など古代の遺跡の可能性が指摘されていた。

調査の結果、焼土層や古代の遺物包含層は確認できたが木炭窯等の遺構は検出できなかった。東側の丘陵斜面から径 10~30cm のピットが少数と谷部から古代の土器が少量出土した。また古代

の包含層の下からは縄文時代と思われる土器片が数点出土した。しかし縄文時代包含層の調査は土器の量が数点であることなどからトレンチ調査を実施したが、そこでの遺物の出土はなかった。



Ph.45 第16次調査全景（南東から）

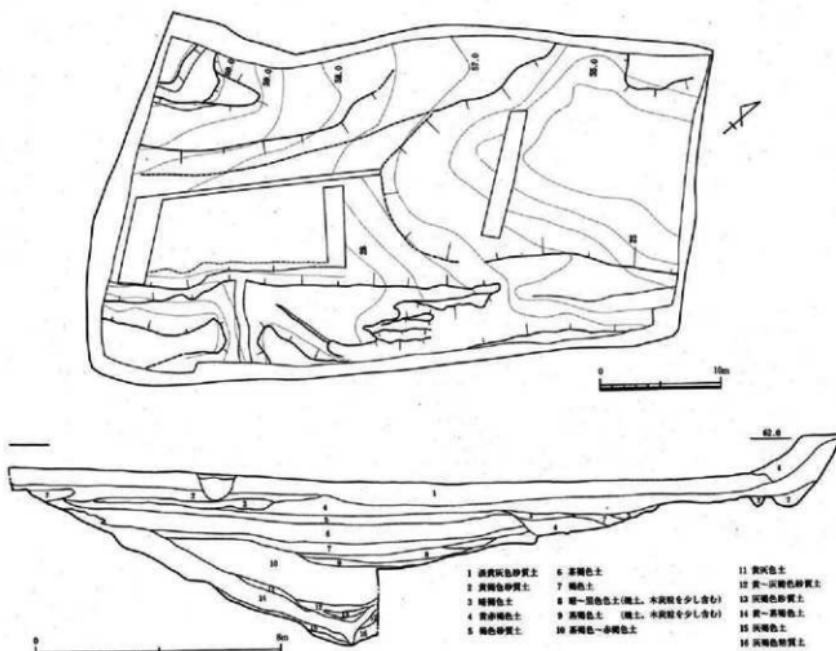


Fig.37 第16次調査全体図 (1/400) 及び南壁土層実測図 (1/160)

第17次調査（元岡古墳群B群）

調査地点は、元岡池ノ浦古墳から北東に派生する標高40m程度の舌状丘陵に立地し、2基の円墳から成る。石材の抜き取りや、近代の果樹園の造成により共に大きく破壊されている。

墳丘規模は2基共に直径11mで、地山整形後版築状に盛土されている。内部主体は竪穴系横口式石室で、西側に開口する。石材には全て花崗岩の転石及び割石を使用する。

1号石室は玄室長157cm、奥壁推定幅80cm、前幅69cmで、横口部には狭道状の側壁が長さ40~50cm程度設けられる。墓道はほぼ水平で、土層断面観察から、初葬を含め少なくとも3回の埋葬があったものと推定される。

2号石室は玄室長196cm、奥・前幅79cmを測る(Ph.47)。墓道はほぼ水平で、土層断面観察から、初葬を含め少なくとも5回の埋葬があったものと推定される。

この他、古墳群の西側の丘陵斜面から焼土坑が2基検出されたが、時期を明確にしえない。

出土遺物としては、石室や墓道から須恵器、土師器などの土器の他、鉄器片、ガラス製玉類などが出土している。

出土した須恵器の年代観はいずれも6世紀中葉であるが、石室形態から築造年代はこれよりも遅るものと考えられる。土層観察から1号墳、2号墳の順に築造されたものと考えられる。

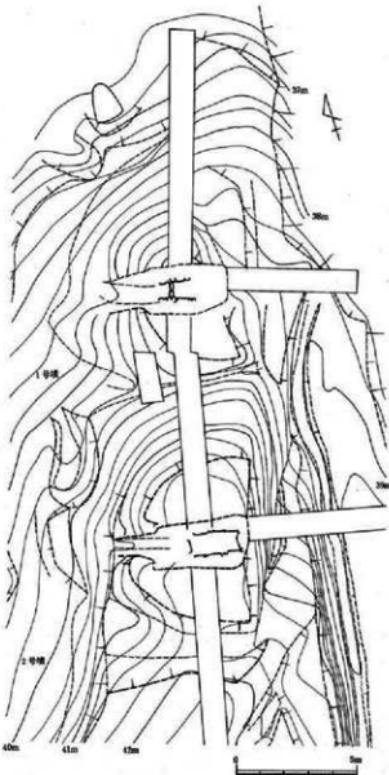


Fig.38 1・2号墳墳丘遺存状況 (1/200)



Ph.46 第17次調査全景（北から）



Ph.47 2号墳石室全景（西から）

5. おわりに

九州大学統合移転地内埋蔵文化財の踏査・試掘調査を平成7年2月から実施し、今年度で7年目を迎えた。試掘・確認調査で前方後円墳6基、円墳67基、地下に埋蔵する文化財（一般遺跡）地点を39ヶ所が確認された。九州大学が前方後円墳6基の内5基、円墳35基を緑地保存地区として保存することを決定され、また、一般遺跡でも製鉄遺構が確認された第12次調査地点を保存する方針を決定された。

平成9年度から発掘調査を実施しているが、縄文時代早期から平安時代までの遺構・遺物等が数多く検出されている。特に第3次調査から検出した縄文時代早期の連結土壙は南九州では多く発見されているが、北部九州では検出例は少ない遺構で、貴重な発見である。また、古墳時代から奈良時代の遺構が検出された第7次調査からは「壬辰年韓鐵□□」（692年）の木簡が出上したり、第12次調査では製鉄遺構が27基検出され、第15次調査では解除（戒）の木簡、第20次では、はじめての元号として使用された大寶元年（701年）銘の木簡が出上るなど貴重な発見がつづき、現地説明会を開催したところ、数多くの市民の方々

が遺跡を見学された。

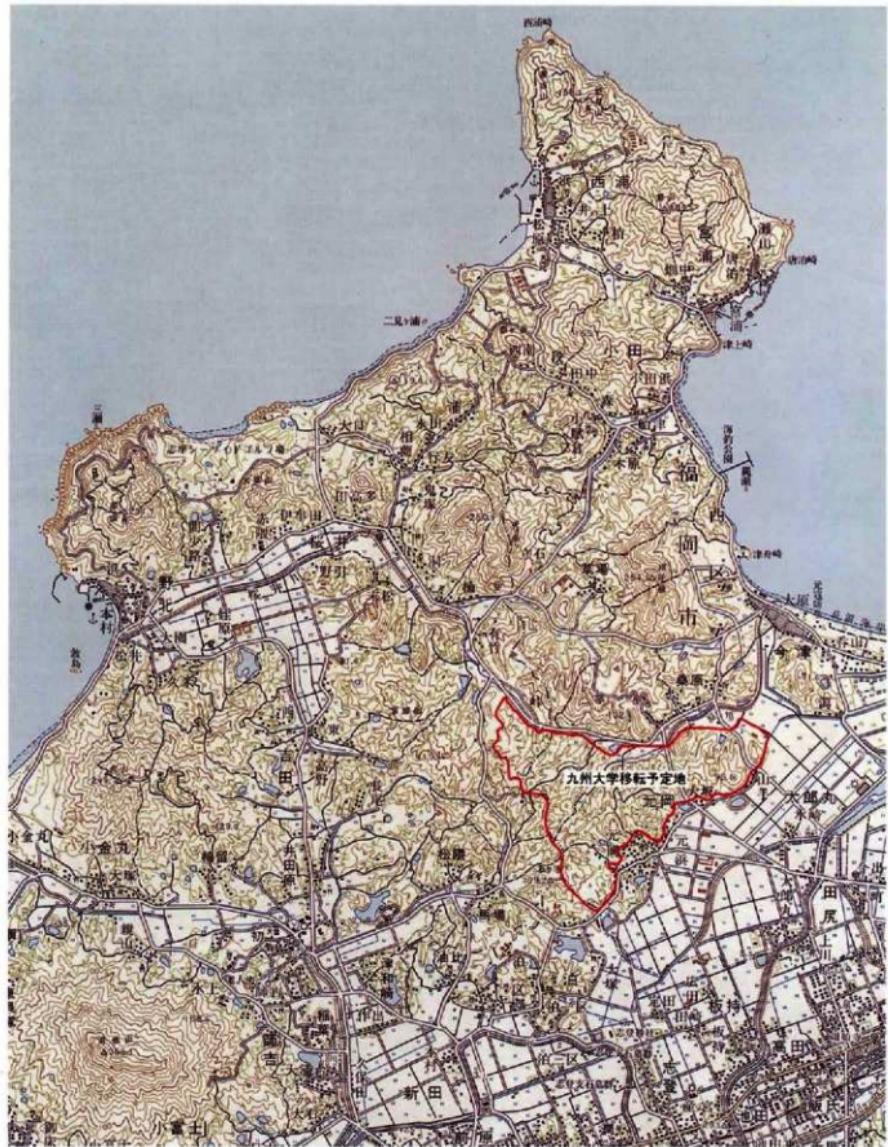
今回概報を出版したのは、試掘調査・確認調査が終了して4年をすぎ、発掘調査も4年間実施している中で、正式な報告書を作成するまでの期間、元岡・桑原遺跡群の概要すら解からないのでは、調査を担当しているものとして非常に不親切であるとの認識から、担当者等と協議の上、概報を出版することにした。また、来年度から正式な報告書を随時出版していく予定である。

また、今まで遺跡名を元岡遺跡群としていたが、元岡地区だけではなく桑原地区にも数多くの遺跡が分布していることから、遺跡群の名称を元岡・桑原遺跡群に変更することとした。今まで桑原地区のみなさまにご迷惑をおかけした。この紙面を借りてご指摘下さったことに対して厚くお礼申し上げますとともに訂正させていただきます。

おわりにあたって、日頃から埋蔵文化財調査にご協力いただいている元岡地区・桑原地区的地元の皆様、福岡市土地開発公社、九州大学及び都市整備局大学移転対策部をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1
—元岡・桑原遺跡群発掘調査—
2001年3月30日

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神1-8-1)
印刷 石橋印刷株式会社
(福岡市博多区東比恵3丁目21-10)



元岡・桑原道路群位置図 (1/50,000)